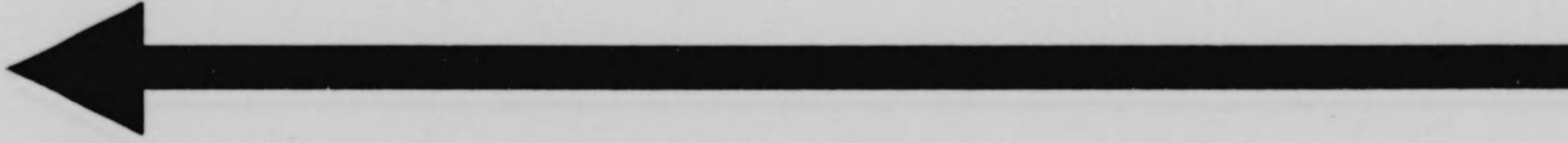


373

377

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



373
377

田舎草紙

173-377



田舎首成

大正
8. 10. 16
内交

目 次

目 次

一、田舎の生氣	一
一、田舎の美風	四
一、田舎の誇り	六
一、田舎の人氣	八
一、信仰の力	一〇
一、心と心との交通	二
一、悟るべく悟らしむべし	一五
一、此の心	一七
一、田舎漢の世の中	一九

目次

一、農業技術員……………三二

一、東より西に馳せて……………三三

一、青年の體育問題……………三七

一、西瓜畑と番小屋……………二八

一、孟蘭盆……………二九

一、借の一字は身を亡ぼす……………三〇

一、農業と人……………三一

一、盛衰は一に人氣の消長による……………三三

一、千圓の争ひ……………三六

一、海部郡の佛教會……………四〇

一、賢き農人……………四三

目次

一、在郷軍人分會長の上百姓……………四五

一、誠の光……………四六

一、眞の村長……………四八

一、工場主の同情……………五一

一、我意を得たる農人の聲……………五二

一、農村の實際……………五九

一、憐むべき三農……………六二

一、善次郎翁……………六八

一、處世の三要……………七二

一、婦人會……………八〇

一、慈悲は慈悲を産む……………八六

目次了

- 一、佛教會の活動……………八八
- 一、夏期の講習……………九〇
- 一、此心は國寶……………九一
- 一、則るべきは此事……………九四
- 一、世に稀なる孝女……………九六
- 一、歐洲戦亂の教訓……………一〇一
- 一、賢き農人の資格……………一〇七
- 一、非常の心得……………一一三
- 一、十可銘……………一二三

田舎草紙

山崎延吉述

田舎の生氣

滋賀縣愛知郡に豊岡村といふがある、其處の村長は村内での資産家である。世に資産家といへば、聊か生氣を缺けるもの、様に感ぜらるゝが常なるに、此の資産家は村長に擧げられて、潜勢力が溢れ出たかと思はる位活動を始めた。由來愛知郡は青年の朝學で有名な所である。早きは午前二時、三時から呷唔の聲が聞える。只豊岡村では朝學がなかつた。

村民の朝起に對する自覺がなかつた。資産家の村長が出来てからの最初の試みは、青年會の朝學であつた。村長が率先して出る、青年も出る、先生も出る、其處で護國の任務に服した名譽の軍人會員は起たざるを得なかつた。良兵即ち良民と心得てゐる在郷軍人連は起たすには居られなかつた。そこで在郷軍人會員も皆朝は五時に起床することになつた。加之、在郷軍人は村の爲めに、寺の鐘をつくことを約束をした、二人宛交代して毎朝實行することにした。寺へ其事を申込むだが、寺僧は承諾しなかつた、鐘は寺でつくといふのであつた。それは或は然らん、然しお寺では毎朝早く鐘をつかぬではないか、それ故吾々がつかうと云のであると、軍人會員は強き談判を開始した。其時寺僧は交換問題を出した。曰く近來寺へ參詣する人が少くなる、特に在郷軍人や青年の參詣が減る、

之れ誠に面白からぬことである。若し諸君が寺へ參詣するなら、鐘をつかさうと云ふのであつた。在郷軍人は直に返答をした、吾々は參詣しませう、其代り、毎朝五時迄に本堂を開けて、燈明をつけ給へ、吾々は誓つて參詣すると。寺僧は喜んで快諾した。そして寺僧も五時前に起きることになつた。今日では毎朝五時に鐘が鳴る、青年も軍人もお寺さんも皆起る、家族は寢て居られぬことになつて、之れも起きることになつたと云ふことである。

村長が奮然立つて村の生氣を鼓吹するや、一鄉靡然として朝起となり、園村云ふに云はれぬ生氣が溢れて來た。これやがて一縣生氣の源泉となり、一國生氣の源泉ともならんか。

田舎の美風

愛知縣碧海郡安城町の字に福釜と云ふがある。名僧松林了觀師の在所にて、古から青年會や少女會があつて有名な所である。近年此邊に鶏の飼育が農家の副業として發達し、一昨年からの米價下落の損失も、それで補充がついたと云つて居る。福釜は戸數三百有餘の所であるが、七十八名で養鶏組合を組織し、其他は賛助員と云ふので、今日は略一萬羽の鶏を飼うて居る。一と六の日に、卵を集めるのであるが、三百貫位は何時にも集まる。之れが一年に、二萬五六千圓の金となる。之は卵だけの値であるが、親鶏で賣るのは此の外である。丁抹のそれに比して遜色なく、廣島縣の川上村の當年に比しては優るも劣ることはない。

町長神谷氏は一里餘りある安城停車場附近の役場に勤めて、精勤の聞えある人であるから、殆んど家事を顧みる暇もなく、亦名譽職なれば家族を養ふ職務上の収入もないのであるが、同氏の令聞は養鶏をして、氏に後顧の憂をなからしめて居るは、中々見上げたものである。此處の人々は、多くは松林了觀師に歸依して居る、宗教心の厚い人々が多いのである。故に養鶏して利益を上げて居る上に、卵を賣り、母鶏を賣るは、所謂殺生戒を犯かすもの、厚き供養をせねば濟まぬと云うて去月二十五日は、其組合で丁寧なる鶏供養をした。此心あればこそ、鶏をよく飼ふことが出来、組合もよく發達するのである。田舎には斯るやさしき人の心があり、斯る美はしき風がある。此の心、斯の風は、長へに田舎の特徴であれかしと、吾輩は希ふものである。

田舎の誇り

愛知縣は碧海郡に矢作町と云ふがあり、歴史の上では面白い話の残つてゐる所であるが、それは昔の古事、今は其字に桑子の勵農會といふが出て、此町の名譽を揚げたものである。こは桑子に山田兼太郎といふがある、中地主なれば精勵なる自作農で、農家には稀れなる數學的の頭腦を有し、取引勘定には人の擬して及ばぬ所があつたものである。而も宗教心に深く、人から土地を買ふにも、賣る人の祖先に挨拶をせよと、先方の位牌をかり受けて、佛事を行つて後にしたと云ふ人である。斯程の人なれば勵農會も、随分農事改良に功績を上げ、桑子の人は、親とも生き神とも信頼したのである。

碧海郡には産業組合の聯合會があり、時々米の共同販賣もやつて居る。斯る事業には關係せねばならぬ人であり、此の如き人あつて發達すべきが斯る事業の性質なれば、衆望の集る結果、聯合會の理事と推されたが、果して同會の事業は、著しく進歩もすれば發達もした。

然るに去年の十二月、不幸腦溢血病で頓死した。家族の悲嘆もさることながら、聯合會や、勵農會は、親に分れた心持をしたのである。去る人は日々疎しとは世俗の習なるに、其處が田舎の誇といふべきか、組合の人々、勵農會の會員は、同氏の歿後手厚き追善もすれば供養もし、山田兼太郎なる小冊子も出來た。去月二十五日には香奠返しを受けた人、更に香奠を集めて、丁寧なる追悼會を催し、遺族の招待もした。

之れもとより故山田兼太郎氏の人格の力であるは勿論なるも、淳厚爲

俗の田舎なればこそ、斯る人の道も見られることならんか、斯る田舎の誇りは、何處にもあり度きことと思ふのである。

田舎の人氣

人は謂ふ、近頃田舎の人氣は悪くなれり、人氣のよい田舎はなくなつた。と、之れ位、田舎のものに取つて迷惑な言はない。何んとなれば、田舎で人氣の悪い所は、多く温泉があるか、海水浴が出来るか、鑛山があるか、工場があるか、或は都市附近であるかである。温泉と海水浴とは都人士の氣保養をする所であり、鑛山や工場は多く都市の資本が投ぜられ、所謂渡りもの、集まる所である。故に温泉のある所、海水浴場に接する田舎の美風の破られるは、多く都人の放縱なる、横暴なる、狡猾

なる行爲により、工場や鑛山のある田舎の悪變するは、寄集まる土方人足の野卑なる、陋劣なる、下卑な舉動によるのである。

元來文明ぶる都人は其行爲の野蠻なるが多く、其容姿の野蠻なる田舎者は其氣風に文明的なるが多いものである。換言すれば都人は外觀に文明を裝ふ野人にして、田舎の人は内觀的に文明に適ものが多いものである。故に今でも都人に接せざる、市人に觸れない片田舎には、人氣のよい、居心地のよい、精神的文明を見ることが出来るのである。トルストイではないか、目に電燈を見て暗きを知らぬ市人の心には暗き蔭が深くない、暗中に生活せねばならぬ田舎の人の心には人道の輝が明かであるは、昔も今も變らぬことである。さるを身の程知らぬ市人が、徒らに田舎の人氣が悪變したと叫び、田舎漢は悪くなつたと謂ふは、自らした糞便の

臭氣に気がつかぬ類ではないか。吾輩は敢て田舎のために辯ずるものではないが、近來深く感ずる所あつて、斯くは市人に反省を促し、都人に自省する所あらしめたいのである。同時に田舎の人が此處に自覺し、警戒する所あるべきを切望して已まぬものである。

信仰の力

信仰なき人は骨なきが如しとは、よく聞いた話であるが、此處に信仰のある人の行事で、いたく吾輩を動かした話がある。

愛知縣は碧海郡の矢作町に山田惣十とて、今年七十餘歳になる老爺がある。去年までは孝行息子があつて、家業や家政のこと一切引受けてやつたれば、此翁は所謂隱居の上なりしなり。然るに其息子一朝忽焉

として死去せしかば、此翁世も身もあらぬ嘆きに弱わり果てもやせんとは、皆人の心配せし所なりしに、翁は一時の愁傷こそしたれ、直に、「先祖が今一度家政を取れとの御催促である」とて、今は壯者も及ばぬ許りの勇氣と元氣とにて家事に執掌し、此頃の農繁期にも、大人一人前以上の仕事をして、何の恨めしき姿もなく、弱つた様もなきは、全く他力信仰の力にやありけるよと、噂せぬものはなく、感ぜぬものとはないのである。

世に信仰を説く人多く、信仰を求むるものも多けれど、斯く信仰に得る所あつて、元氣よく勤業する人の少きは、恥かしき次第ならずや、とは吾輩自ら省みての嘆息である。世に貴ふべき人多けれど、信仰の力を得たる程貴きはなく、有難きことも多けれど、信仰の功德を味へる人は

ど有難きはなかるべしとぞ思ふ。

心と心との交通

詩聖タゴールの講話中に、西洋文明は機械の發明を來たし、機械の利
用によりて國と國と、地方と地方との交通は益々開け、海洋も之を隔つ
ことが出來ず、山岳も之を遮ぎることが出來なくなつた。故に昔妖術と
も唱へし縮地の術は、今は何處にもありふれたこととなり、爲めに吾人
の便利を感ずることも亦、多大なるに到りしは、掩ふべからざる事實な
れど、人の心と心とは、比隣と雖も十里を隔つるが如く、同窓と雖も對
岸の人の如く、而も愈々疎隔する嫌はなきや、とありたるは、面白くも
亦貴き忠告とは思ふた。

親の心が子に通じ、夫婦の心が通じ合ひ、兄の心と弟の心とが共鳴を
なし、主人の心が傭人によく分り、先生の心が弟子に徹した様は、往來
の不便なりし昔ほど、今に優つて居つた様に思はるゝは、獨り吾輩の感
想のみではあるまいと思ふ。

外の事は休説、我農村問題の上に於ては、如上の言を適用すべきこと
が甚だ多いのである。若し爲政者の心と農民の心とがよく通じ合つて、
里道や郡道の甲乙相連絡するが如ければ、從來立てられた農業政策は、
今一層適切であり、又た實行されたであらう。農民の心が技術者の心に
通じ、農民の心に通じ行く技術者の心が眞實なりせば、農業技術の功德
は今日の如き情ないものではなかつたであらう。地主の心と小作の心と
がよく交通せば、恐らく地主と小作との間に忌はしき紛擾を起す場合は

なかつたであらう。實際町村當局者と町村民との心が通じ合へる處に樓
範村が出来て居り、幹部と會員や組合員との心がよく交通して居る處に樓
良なる團體や會が出来るのである。

我農村は都會に比して、人の心と心とが通じ合ひ、假令十町二十町を
隔つるにしても、恰も比隣の如き誼を見るとは云へども、今や汽車が
かり、電車が通じ、自轉車や人力車の往來が頻繁になればなる程、人心
の間に缺陷を生じ、空間を生じ、障壁を生じ、宛然吳越の人を一堂に會
せしめた様な感じのする所がある。而も其が勢をなし、流をなす恐があ
る。

夫れ農村問題の解決や道多し。或は政策の宜しきを得るも必要であり、
手段の巧妙なるを要するも大切であり、施設計畫の遺漏なきを期するこ
る。

とも大事なれど、吾輩をして尤も痛切に感ぜしむるは、人と人との心の
交通を圓滑にすること、其道路を往來する人心の頻繁なることほど大
切なるものはあるまい。今や上下を通じて、人皆農村問題に熱中すれど、
之は方法のなきにあらず、手段の乏しきを嘆ずるにも及ばず。たゞ如何
にして人の心と心とがよく交通するかの問題さへ解決が出来れば可なり
であるが、此處に着眼して着手するもの、少きは、我農村のためにも痛
恨の情に堪へないのである。故に敢て之を識者と篤志者の前に提唱する。

悟るべく悟らしむべし

農村疲弊の聲も久しく聞え、其の事實も所々に顯著であるに、加へて
米價の下落は、益其聲を高め、其事實を鮮明にした。此時只獨り絲の相

場のみ高ければ、養蠶こそよけれど、我も人も養蠶に熱心しけるに、愈々養蠶の時節となれば、長野群馬は降霜にて少からぬ打撃を受け、愈々上簇に際しては、愛知縣の如き桑葉の騰貴に苦しめられ、繭の相場の廉きに失望したものが澤山出来た。思ふ儘にならぬは浮世の常とは云ひながら、氣の毒にも浅間敷限りである。若し夫れ繭を賣つた金が飲酒放縦を惹起し、醒めて家族に申譯なしとて縮るものに至つては、言語道斷のことである。

降霜は天災と云ふべけれども、猶之を豫防し得ることが出来る、少くも其損害を少くすることが出来る筈である。桑葉の高きに苦しむは、所謂養蠶を投機的に經營するもので、之は全く不心得の結果と謂つてよい。收購に際して農民の脚元を見、約束より二三割を遞減して買はんとし、

又た相場を下けて買はんとするは、製絲家の奸策憎むべきものあれど、之を豫防することは敢て難からざるものである。

夫れ副業の經營を以て本業の不足を補はんとし、勞力の分配を宜しくし、以て經濟の順調を得んとし、資本の回收を速かならしめんとて晝夜兼行の努力を吝まざるものは、須らく用意を周到にして準備に遺漏なきを期し、自家防衛のために強固なる協同經營をなすことが肝要である。如斯は苦き經驗を経たる今日に於て悟るべく、又た悟らしむべきである。我敬愛する農民諸子、此處に覺悟することなくして可ならんや。又我農民指導に任ずるもの、此好機を逸するなくして悟らしむべきである。

此 の 心

愛知縣は西加茂郡に高橋村といふがあり、縣下唯一の優良村であり、生氣ある農村である。之は全く村長今井幾四郎氏の精勤努力の賜であり、氏の畫策の宜しきを得たる結果である。

聞説、今井村長は村長に就職以來一日も缺勤したことがないと云ふことである。元日も晦日も、同氏の身體は役場に見えないことがないと云ふのである。而も同氏の役場に出勤するや、必ず村社に参拜して、村治に貢献する所あらしめ賜へと祈禱し、役場より帰宅しては、祖先の位牌に額づきて、今日一日家族の無事なりし禮を述ぶるが常なりと云ふことである。道理なる哉、氏の健康は衆にすぐれ、氏の技能の群を抜くものあるは。而も斯くの如きは、氏が村を思ふ一心のためであつて、天品にはあらず、氏の獨占にもあらず、此心さへあれば、何人も亦斯くあるべしとは、同村視察者の所感なりき。

貴哉此心、此心の貴さは吾れ人共に得たき者である。

田舎漢の世の中

梅雨に入りて雨は霏々乎として止む時なく、鬱陶しさは醫へんものなし。加之夏期に入ることなれば、日一日と暑さを増し、飽和せる水蒸氣と共に、人には言ふに言はれぬ不快を感じしむ。故に弱き人は病を得強きも病氣の人の如く化する今日此頃は、蓋し田舎の多忙期にて、麥の刈入、養蠶の上簇、田植の眞盛り、續いて蔬菜の手入、夏蠶の世話、田草取りにて、目も廻はらん計りなり。家族團樂の労働も、夫婦共稼の勤勞も、老幼の手助も、此期は秋の收穫期と共に年内の書入時である。誠

に梅雨より夏季にかけて、田舎漢の世の中とこそ云ふべきなれ。
昔、佐賀藩主鍋島直正(閑叟)が近郊へ鳥獵に出られた途中で、突然侍
者を顧みて、

「汝等は活きた大黒を見たことがあるか」

と問はれた。供の者は異口同音に

「繪にかいたものか、木像の外は未だ見たことは御座りませぬ」
と答へた。侯は忽ち前面の畑に糞を着て耕しつゝある農夫を指して

「彼の鋤を執る者、鋤をとる者は、皆活きた大黒、福の神ぢや、彼の福
の神があればこそ、其方達も我等も饑寒を免がるゝのぢや、彼の實に
我々の生命を繋ぐ米麥を授けてくれる神様ぢやによつて、常に其恩を
思ひ、假初にも彼等を虐げるやうなことがあつてはならぬぞ」

と戒められたと云ふことである。

閑叟公の所謂活きた大黒様を見るべきも、今日此頃であると思へば、
世の中の福を希ふものは、室内にて蒸熱に苦しむよりは、ちと田舎の大
黒様の活動振りを拜むがよいと思ふのである。

今は神なる故乃木大將が、田草とり居る農夫を見て、何時も黙禮して
通過し、汗や脂に塗れて風雨を厭はぬ百姓を見ては、感謝の意を表せら
れたりと聞けるが、其の貴き労働に服する農夫の姿も、此の粒々辛苦の
勤勞を嘗める百姓の形も、今日此頃が最もよく偲ばるゝのである。

吾輩は雨につけ、暑さにつけ、今日此頃の田舎漢の世の中に對して、
同情の念が湧き出で、堪へられぬものがある。

農業技術員

福島縣は石城郡に草野村と云ふがある。從來世に聞えたことのない村なりしに、近來地方に在りては模範村との評判が高くなりき。そは大正四年の春に今泉敏といふ一青年の農業技術員を聘したるに始まりしもの由、今は婦人農會を設けられて、同村婦人の農事思想は當年に比すべくもあらず。又た篤農家を毎月一回集めて農事の進歩を相談すべき満月會もあれば、指導宜しきを得たる青年會もありて、村民の勤業的勤勞は日に月に面白く向上し、最近には村農會の經營にかゝる農業相談所なるものが建設され、農業館、圖書館、購買販賣組合事務所、及諸會の相談集會所兼用に供せられ、他に類例なき便利を感ずるに至りしとか。

一人の農業技術員を聘して、這般の功德を村民の啓發に輸すを思へば今の如く振はざる町村農會の多き世には、何れも之に則りて面目を一新する所あるべきである。勿論人を得るは難事にはあれど、求めて得られざる筈はないものである。其難事に托して必要にして且つ功德多き農業技術員を設置せんとせざるは、蓋し愚の骨頂ではあるまいか。若し夫れ聊かの費用を吝みて、之を設置する能はずと云ふものあらば、そは所謂自亡自滅の町村と云ふべきである。

東より西に馳せて

我輩は六月より八月にかけて、東は巖手縣の一郡より西は鹿兒島縣に

至る間を、兵庫縣に、岡山縣に、廣島縣に、福岡縣に、短きは三日間、長きは一週間滞在して、所謂田舎の氣分に觸れた。何處も同じ秋の夕暮然たる田舎の經濟界は、東も西も變はらぬ様で、見るは氣の毒、聞くも情なき心持がする。或る所では、地主の倒産せしものを聞き、或る所では、耕地整理は見事に竣工せしが、爲めに四十二萬圓の負債が農村の貧乏を上塗りつゝありと聞かされ、或所では産業組合は畢竟散業組合なりと罵倒するものを聞き、或所では今日の農村は破きつけられた龜の様なもので、手も足も出ぬ境遇に在りと云ひ、或所では小學校の教員給は此二月以來不拂なりと云ふことすら聞いたのである。活氣のなきは東西を分たぬ我農村の現狀である。

此間に各地ともに地方改良の講習會は開かれ、自治民育の講習會を開

く、さうでもせずば、地方は自覺をせず、民衆は發奮興起をせぬ様である。而も何人がよく自覺し、誰れが一番緊要して立つやは、吾等の刮目注意を怠らざる所である。

總體に於て、町村當局者側よりも、地方教育家に自奮の氣を見ることが出来様であるは、決して吾輩の癖目ではあるまい。

近來各地に於て、農村の小學校は農村的に經營されべきであり、農民の教育は、等しく農民的でなければならぬと云ふは、所謂異口同音であつて、教育家に其自覺の生じたことは確かである。吾輩は沈衰せる農村の氣分の中で、獨り教育の方面に油然として勃起する生新の氣を認めて、快哉を叫ばざるを得ぬである。

教育界の覺醒は延いて青年の指導にも活氣を與ふることが多い。今や

何れの地方でも小學校長は、青年者の指導啓發を以て任じて居る。故に教育家の中には、随分指導に工夫を凝らすものや、啓發の方法を研究して維れ日も足らぬ概のあるものもあるは、誠に我青年の爲めに賀せざるを得ぬ。乍去、一般に教育家の通弊として、活潑の氣象を缺き、剛健なる氣魄に乏しき憾みあるは、吾輩の大に痛恨とする所である。

次に東西を通じて、一般民衆の注意する所となつて來たのは、婦人に關する問題である。即ち婦人を教育せねばならぬと云ふこと、并に婦人の教育は特に農村的にせねばならぬと云ふことである。特に學校教育に於て、漫然と都市的氣分を帯び來つた農村婦人の始末には、何れの地方でも困り果て、居る。吾輩は近き將來に於て、此方面から新らしき農村問題の生ずることを期待せずには居られないのである。

青年の體育問題

内務省の衛生局で行つた保健調査の結果によれば、我國民の青年者、壯年者の死亡率は、英、佛、獨の三國に比して、二倍乃至三倍の多きに達すると云ふのである。區が貧乏なる上に、國民の青壯年者に死亡する者が多いと來ては、泣つ面に蚌以上の痛た事である。而も他の文明國では、漸次に死亡率が減じて來るに、我が國では増加するといふのは、情ないことではないか。

何故の死亡率増加かは不明であるが、肺病の増加することは蔽ふべからざる事實であり、不攝生の誘因する死亡の多いことも隠れなき事實であれば、我國民の健康に重大の關係を有する地方農村に於ては、此際大

に衛生的の新運動を起す必要があると信ずる。
我輩は我農村當局者と、教育家と、醫師とに向つて、特に研究と努力とを要求するものである。

西瓜畑と番小屋

西瓜が改良されて需要の増したが爲めか、或は米價下落して西瓜に利益あるが爲めか、近來西瓜の栽培が著しく殖えて來た。而も何れの地方でも、西瓜畑には必ず番小屋が建てられ、夜番が必ず居るは何の爲めか。蓋し農荒しがあり、西瓜泥棒が出るからである。吾輩は農村道德の頹廢を示す標目であり、道心日に微なるの證據物件として、之を悲しまざるを得ぬ。

五 蘭 盆

昔しは李下に冠を解かず、瓜田に靴を結ばすと謂つて用心したと云ふに、今は人の苦勞を盗み、勤勞の結果を奪ふもの多しとありては、情なき限りならずや。吾輩は夫等地方の青年會や、軍人會の健在を問はんと欲するものである、又た教育の効果を疑ひ、宗教の功德を怪まざるを得ぬものである。

世の進むにつれて古へに戻りゆくは曆であり、文明の利器が應用されるに反して、昔に歸るは大陰曆の行事である。今は何れの地方でも、盆と云へば舊曆にてするが多く、正月と云へば舊正月であるが多きは、抑い何の爲めぞや。我國に於ける地方行事は舊曆に適する様組み立てらるゝ

がためなるか、贈答勘定は舊でせねば氣がすまぬものにや。他の文明國に於て陽曆が行はれ、陽曆によりて事を行つて差支なきに、獨り我國に於てそれが行はれないと云ふ道理はなき筈である。廣島縣の廣村では、宗敎家が率先して陽曆を用ひし爲め、今は何事も陽曆にてなすと云へば寺の關係にてもあらざるを知るべきである。さるにても因習の人を囚へる力の強きことよ。田舎漢の習慣に制せらるゝ意氣地なさよ。我輩は地方農村の爲めに遺憾を感じ、地方農民のため痛恨の情に堪へぬものである。

借の一字は身を亡ぼす

農村問題てふ文字ほど流行せる文字はなく、農村救済てふ言葉ほどよ

く聞く言語もない程に、農民と農業とに關しては悲觀の資料が多い中に我農民の借金を恐れぬと云ふことほど、恐るべきことはあるまいと思ふ。蠶が豊作と見てとれば、繭賣らぬ先から金をとつた心持で借金し、低利の金があれば借らぬが損の様に心得て借金し、肥料が不足だと云つては借金し、米が安いからと云つては借金す。而も借の一字が倒産の因となり、亡身の源となるには心付かぬ様は、よくも貧乏神に呪はれたるものかなと思はしむるのである。されば農民の救済は借の恐るべきを知らしめ、借金の始末をつけさせるより効果の顯著なるはない。故に我輩は偏狭の嘲を受くと雖も、而も今の農村の現状に顧みて、特に借の一字に對して警告せざるを得ない。

農業と人

農業は長へに必要な仕事である。農業は日進月歩の進歩をなすべき業務である。農業は時代の推移に伴うて曲折し、決して行つたらぬ事業である。唯之をなす人によつて、或は國家の用をなすに足らずと思はれ、文明的の經營法なきもの、如く解釋され、改良も行つたりて餘地なきもの如く考へらるゝのである。吾輩は農業の萎微振はず、農事改良の遅々乎として進まず、農の收利の貧弱なる今日の狀勢に鑑みて、特に農界に人なきを嘆じ、農村に人材の蒐集すること尠なきを遺憾とする。我農村の人、之を思ふて緊揮一番し、我農村青年たる者、此處に悟りて奮起する所あるべきことを、千祈萬禱して止まないものである。

盛衰は一に人氣の消長による

三重縣は河藝郡に河曲村と云ふがあり、其處の大字に十宮と云ふがある。此處は當年日本の三老農の一人に數へられた古市與一郎翁の生地であり、且つ理想の一端をも行つた所である。翁の感化か、將また其處の人氣が宜かつたのか、宅地と道路との區劃が井然として整理され、富裕の點に於ても、郡内で一頭地を抜いて居つた所である。何んでも翁在世の砌りは随分疲弊した所であつたと云ふが、疲弊に自覺した村民の勤勞は今でも郡内の評判に残つて居る位である。故に十宮の境遇が古市翁を生産したと云つてもよいと同時に、村民をして翁の説に聞かしめたものであらうとも思はるゝのである。

隣村に一の宮村と云ふがあり、其處の字に高岡と云ふがある、幕府時代から明治の初年にかけて、此村に沿うて流るゝ鈴鹿川の川渡を以て渡世するものが多かつた所である。川渡の渡世は東海道で大井川あたりにもあつたもので、所謂雲助根性として旅人の懐中をあてに生活し、酒でも飲めれば上機嫌であつた者である。世は開け、道路橋梁が整備してからは、川渡の渡世で生活することが出来なくなつた。而も長い間の雲助根性は抜けにくくもあらず、道樂で惰ける癖は容易に直らないが爲めに、遂に高岡の部落は、見るも哀れな悲境に陥つたのである。其當時彼の河曲村の十宮は稍々順境に向うて居つたのである。

窮すれば通じ、倒れて起つは、人の心の様なるが、高岡の窮民は遂に自覺して、奮闘努力の民となつた。彼等の或者は夙に起きて働くもあり、

或者は夜半に尙田圃を去らざるものありて、一村の人氣は勤勞せでは止まぬと云ふことになり、儉約せねばならぬと云ふ風になり、爲に高岡へは嫁にやるな、と云ふ俚諺さへ立つ様になつたと云ふ噂がある位である故に十年を経、二十年を経たる今日に於ては、高岡の村民は資力に於て他に遜色なしと云ふ程度に達した。

此處に面白きは、彼の十宮であるが、高岡より先んじて自覺した丈に順境に立つことも早やかつたが、富むで氣驕り、安心が出来て油斷するに至つたことも亦早やかつた。それで今日は十宮の土地の四割は高岡に買收され、今や全村の經濟状態は下り坂になつて居ると云ふが、高岡は其代はり、今や順境の頂天に達し、宛然峠を上りつめた形勢であると云ふが、或者の評判を聞けば、高岡村にもそろく惰けるものが出初たと

云つて居るから、或は近き將來に於ては、之も下り坂に向はんか。夫れ困窮に陥りて自覺奮闘するもの多くして、富んで誘惑に接する危険に自覺して用心するもの少きは、古來本邦の通弊ではあるまいか。誰れか盛衰は一に人氣の消長によるを悟つて、富んで益々榮え、榮えて益々向上することに努力せざるや。吾輩は、如斯農村の盛衰常ならざる状態を各所に見て、感慨に堪へざるものある。

千圓の争ひ

三重縣北牟婁郡の錦村と云へば、當年内務省の數へた無稅村の一である。山に木あり、海に魚の多かつた時代は、無稅村の極樂郷であつたが天は何物をも人に與へず、只其人の働に與ふると云ふ眞理は吾人を詐ら

ず、極樂とのみ喜んで、額に汗するを欲せずなつた錦村の村民は、遂に困窮の苦き經驗をせねばならぬことになつた。村長になるべき人は居らずなり、村事業をやるべき資金は出所がなくなり、個人の財産は皆人手に渡さねばならぬ悲境に陥り、當年の錦村も、遂には「ボロ」村となり果てた。

斯る時に監督の責あり、指導の務あるべきが郡役所である。役所は役所の權威を以て、當時長島町の町長たりし鈴木逸男氏を否認なしに、錦村の村長として赴任せしめた。鈴木と云へば酒豪の名高く、議論家の評判は鳴り響いて居つた人である。氏は村長として赴任するや、先づ嗜好品として生命の次ぎに置きたる酒を斷つた。而も議論を棄て、實行主義を採つた。當年の氏は眞に、勇猛精進の權化であつた。直情徑行の神威

があつた。故に曲柄は多く、事故は澤山生じたが、一期の村長時代を経て、遂に民をして服せしめた。而かも心から服せしめたのである。特に昨年より本年にかけて氏の試みたる鱒敷は、見事に大成功を奏した。之れ所謂自ら助くる者に天助ある謂敷、或は天亦氏の熱心努力に感應したものか、吾輩は衷心氏の爲めに賀せざるを得ぬのである。

氏は今年村長の職権を以て、有給村長の條令廢止を村會に提出した。村會議員は氏の村を思ふ誠意に感激した、村民は氏の村民に對する熱き同情に感泣した。此に於てか村民の間に謝恩の聲が起り、遂に村會は氏の功勞に報ふべく千圓を贈る相談をした。然し鈴木氏は事業半にして報謝を受くるは快らむとして謝絶し、村民はそれでは相すまぬと云ひ、此處に珍らしき争が起ることになつたのである。

結局氏を村長に職せしめたのは郡役所なれば、郡長に仲裁を請ふがよからん、郡長に裁決を頼むだが、郡長水原氏は、吾輩世に出で、斯る争に接したることなし、また今後斯ることに出席することもあるまい。従つて斯る仲裁をなすは、之れ吾輩の一生一代事なり、願くば吾輩をして仲裁をせしめよ、而も吾輩をして仲裁者の面目を立てしめよと宣告して、遂に鈴木氏をして村民の希望に副はしめたりとなん。

愚劣なる話柄の多き我町村自治體に於て、錦村のその如きは、眞に天籟の響に似たりとや言はんか。吾輩は鈴木氏の誠意に對し、又た錦村の村民がやさしき心情に對し、心から感謝の意を表するものであるが、而も如斯は獨り吾輩のみではあるまいと信ずる。

海部郡の佛教會

近時物質上の進歩につれて、後れたりとせられたる村神上の開發事業が萌出る傾向を生じ來つたのは、時代の要求でもあらうが、愉快なものである。我海部郡(愛知縣)は佛教の盛なる地方で、従つて寺院の數も多し、僧侶も亦多數居る所であるが、此頃左の趣意書に因つて海部郡佛教會の組織成り、正に活動の幕を開いた。

□趣意書

英國の社會學者スコット氏嘗て日本の農村を巡視し、宗教者の地方改善に没交渉なるの實情を奇とし或僧侶に問うて曰く「宗教者として地方の善に熱心せざるの内情ありや」此の問に對し、吾人の崇拜する

南條文雄博士は曰く、「地方改善に熱心せざるは従前夫等の習慣なきに よると、又一面眞諦門に重きを置きし結果、此點に迂遠なりしは遺憾の事なり。今後は出來得る限り僧侶も之に關係すべきは勿論、社會をして宗教者に依頼する様にすべきなり。吾人は此兩氏の問答に對し、如何の感應ありや。ス氏の質問は僅か數言に過ぎざれども、よく現代宗教者の一般の狀態を遺憾なく突破し得たるものと云ふべし。

吾人は未來に對する指導者たるは勿論なれ共、亦現在に於ける指導者、否地方改善の中心たらざるべからず。時代の進歩は益々急にして愈々複雑となり、物質的方面には各種事業の改良發達と共に、生産の増加を計らざるべからず。精神的方面には文明の副産物たる奢侈、遊惰、輕薄等、惡風の矯正を計り、社會道德の向上に努めざるべからず。

而かして之等改善矯正等に就ては、各種機關の存するありて、日夜指導誘掖に努められつゝありと雖も、吾人宗教者も亦徒に出世間的救済にのみ陥らず、宣敷時代の要求に應じ、現代に於ける指導者たらざるべからず。

本郡は各宗派を通じ三百に垂んとする寺院各町村大字に分布的に存し、宗教の最も旺盛なるの地たり。故に今回郡を一區域として、各宗合同して海部郡佛教會なるものを組織し、産業教育等各種機關と連絡をとり、南條博士の所謂習慣を打破し、農村の改善に努め、以て現代に於ける僧侶の使命を完うせんことを期す。全國に五萬有餘の僧侶があると云ふことなれば、此等宗教者が、或は個人として、又は團體を組織して、先づ自覺自修し、進むで歸依者の指

導啓發に劣めても、其功德や計り知るべからざるものがあるであらう。吾輩は海部郡の佛教會の前途を祝福すると同時に、各地の宗教者が皆之に則らんことを希望するものである。

賢 き 農 人

百姓仕事は骨が折れるとか、農業は難儀な仕事だとか、粒々は眞に辛苦なものであるとか謂つて、所謂勞働忌避でなくとも、比較的農耕の仕事に勞多しとするは、恐らく農村の時代思想とも謂ふべきであらう。之れ農業の仕事が骨の折れるにあらずして、無智の結果骨折り損に終ることがあるからである。それと同様に、農業は必ずしも難儀な仕事にあらずとも、之をなす人に規律がなくば、仕事に纏りがつかず、きまりが

つかぬからして、何時までも働かねばならぬ様になるからである。同時に粒々皆辛苦と限つた譯ではないが、世間が分らず、需要供給の實際が呑み込めなくては、時に勞した甲斐のないことにもなるからである。

兵庫縣掛保郡旭陽村に三輪岩治と云ふ壯年者が居る、此人は眞の農人生活をなせる男であるが、常に

夏冬も同じ七時を樂にねて

起きなば働めおのが勤めを

と高唱して、誠に氣樂に百姓をして居る。今や一部落と雖も、氏の態度に化せられて、何れも面白く百姓に努めつゝありと云ふ。賢き農人は、何處に於ても、何れの時でも、斯くあるべき筈のものである。

在郷軍人分會長の上百姓

兵庫縣加東郡と云へば、酒屋には知れ渡つて居る酒造米の産地である。

其處の河合村に、在郷軍人分會長を勤めて居る後備の陸軍騎兵少佐の陰山深雪と云ふ人が居る。歸郷してから俄に百姓の研究をしたと云ふが、

多收穫では常に郡内の最優者であつて、反當り五石以上を得るさうである。人智の發達は、土地を化し、自然を利用し、種類を改善するが故に、

近き將來は七石を收穫する筈であると信じきつて居ると謂ふ。

諺に熱心は工夫を生み、勤勉は桑葉を變じて錦繡となすの事實に徴せば、陰山氏の信條が實現も亦疑ふの餘地はない。同氏の熱心なくして徒に米作の不利を説くものは慙むべく、又た同氏の勤勉なくして、農耕に

収益勘きを嘆こつものは、兵愚笑ふべきである。世の生れながら農耕をなすもの、又た幾多在郷軍八會の諸子、希くは陰山氏を鑑とせば、獨り我農界の幸福なるのみならず、眞に國家の慶事である。

誠の光

兵庫縣は飾磨郡と云へば、姫路市を圍める郡であるから、人氣は自ら都市輕薄の風に靡き、何處となく華奢の俗にも染まるべき筈なるに、誠の人は何處に於ても不動の信仰あるものと思はれて床しきは、荒川村と云ふに、現在産業組合長である竹内鐵二郎氏の身の上にごありける。

氏は世人が艱難なりとする繼母に事へてよく孝敬をいたし、異母弟を親切に世話して、今は盡く夫等を獨立せしめたりとなん。

氏は小學校の義務教育を了へて高等科に入り、更に高等科を了へて、尙學校に請うて一箇年の復習をなせしと云ふが、爾來獨學して徴兵適齡に際し、一年志願兵を志望して、首尾よく及第し、在隊中は衆に抽んで努力したる結果、遂に歩兵中尉功五級の榮冠をも得たりと云ふ。
幼より農事に勵み、糞水を掬して敢て辭せず、爲めに治産の成績衆に優れて、今は資産も大分出來しかど、勞働の神聖を貴んで、暇さへあれば農耕に従事すと云へば、其術にかけても村内には珍らしき手腕なりと
のことである。

氏を知る人は、氏を稱して誠意誠心の人であると云ふが、誠なる哉、誠なる哉。誠は家族を圓滿にし、家業を發展せしめ、家風を發揚し、立身出世は愚かなこと、人をも、世をも濟度するといふことは、氏の性行

によりて證明さるゝのである。嗚呼、誠は萬善の基、誠は人の光明であり、日月の如くである。吾輩は獨り農村に於て斯る誠の光りを認むるを以て、我農村の誇と感ぜざるを得ぬものである。

眞の村長

同じ飾磨郡に下中島村と云ふがあり、村長は大森英文氏であるが、氏こそ吾輩は眞の村長であり、名譽職の村長でありとする。

氏の家はもと五十町餘の地主であり、祖父は新田を経営して、村民の恩人であつたが、父なる君は政治に奔走して産を顧ることなかりし爲に一時は資産も傾き、昔に變る憂き暮らしもせねばならなくなつたと聞く。氏は此裡に成長し、やがて中學をも卒業し、一家を背負うて立たねばな

らぬ所から、高等女學校の卒業生なる某女を娶りて、新なる家庭を作つたのである。由來中學の卒業生は農耕に奮闘する能はずと云ふが定論であり、女學校上りの嫁さんは労働嫌と云ふが輿論であるに、齊家を以て己が責務と自覺し、家名發揚を戸主の任務と悟りし氏は、家業の農事に努力して倦む所を知らず、よく細君をも化して農家の世話女房となし、夫婦共稼の奮闘振りには、一時下中島村の異彩であつたと云ふことである。時日は桑葉を變じて錦繡となすてふ諺にもれず、氏の家は年々榮え、氏の手腕は益々練れて今日では農事改良の功勞者と云へば、郡内でも知らぬ人もなき位であると云ふが、實に我農民の立志傳中の人たるを知るのである。

氏の立身出世の間に於て、町村當局者の爲政宜しきを得ざりしか、村

治亂れて治績擧らず、村民堵に安んずるを得ずなりて、果ては村長に選ばるゝ人もなく、村長たらんとする人もなくなりて、哀れ、中島村は郡内の厄介物となつたのである。誰れ謂ふとなく、村長に戴くべきは大森氏であらう、氏に依るにあらざれば村治の回復は出来まいと云ふ聲が高くなつて、氏は遂に村長に選舉された。同時に紛擾も静まり、役場は何時しか村の中心となつたと云ふが、面白からずや、難有からずや。吾輩は不幸にして、氏の村長としての手腕を知らないが、氏の経歴と氏の衆望を負へるは、吾輩の理想とする眞の村長であると謂ふに躊躇せぬのである。吾輩は氏の前途を祝福し、氏によりて美化さるゝ下中島村の光榮を祈禱するものである。

工場主の同情

愛知縣は幡豆郡横須賀村に、幡豆製絲會社と云ふ製絲會社がある。規模は田舎の一工場で微々たるものであり、工女の數も僅に百八十名を算ふるに過ぎぬ。乍去工場主の同情、工場と工女とが家庭的の團樂をなし、忌はしき工場法の必要を認めぬ所に、貴き模範を示して居るが、大なる價値である。曩に工女の罹病を憂へて、晝間一回のおも湯を吞ますを工夫して好成績を示したのであるが、此頃亦工女の出身は農家であり、將來は亦農家の婦人たる身の上なるを思つて、工場の傍に五段餘りの土地を購つて社庭園と名づけ、豚の飼育と果樹蔬菜の栽培とを始め、工女を交代して農

耕にいそしむとにしたのである。工女の健康が進むは勿論、工女の娯樂となるは言ふも更なり、工女が爲めに農耕の術を覚えて將來に資することの多きは、誠に此處の工女の獨占的幸福と云つてよいのである。故に工女が工場に勤むるを光榮とし、長く工場の爲めに報恩の義務心を有すると云ふは當然のことである。今や工場樹立の勢は空前のことであり、工場生活をなす可憐の少女は益々多きを加ふるのであるが、吾輩は工場繁榮の爲めに、又た工場に働く人の運命を幸福にする爲めに、衷心工場主の斯る同情を希うて止む能はざるものである。

我意を得たる農人の聲

吾輩の所に種々の手紙が來、種々の主義を聞く機会があるが、左の所

説は我意を得たる農人の聲として、大に敬意を表するものである。護啓我農村救済の問題上下の叫ぶ處となりて、茲に約十年、未だ格別の實績を認めず、誠に残念に有之候。本來我農村は、

- 一、他より救はる可きものなりや。
 - 二、所謂救ふてふ世の識者に、救ふだけの力あるものありや。
 - 三、首を延ばして救をまつ可きものなりや。
- 小生近來此問題を竊かに案じ、自問自答竟に、
- 一、決して他に救はる可きものに非ず。
 - 二、寧ろ進んで國家民衆を救ふ可き大使命あることを認め得申し候。
- 凡そ現代の世の中に、最も缺如せるものは、申す迄もなく誠の心にて候。眞摯なる態度、淳朴なる氣風にて候。軍人、政治家、學者、著述家

新聞記者、教育家、宗教家、商工業家皆然りにて、實例を擧ぐるに違なし、而して先生の常に高唱せらるゝ如く、吾々農民は日夜彼の偉大なる自然の感化を享けて、至誠神に近きもの（近來はちと）若し彌此徳を砥礪して、農民本然の性を發揮せば、却つて此不眞面目なる現代を救済し得べきこと、確信仕り候。

次は勤勞の美風の頽廢せること、此段又多言を要せず。働くことを以て生命とし收入とする我農民にありては、勞働が一つの習慣性となりて居り候。吾々は日々少くも十二時間以上、六七月及び十、十一月の如きは十六時間以上、十九時間も働くもの、勤勞は恐らく國民中唯一に候。此勤勞の美風を益々作興して、彼の懦弱にして怠惰がちなる民衆を救済すること、むしろ吾々の責務と奉存候。

三つには、日に日に衰へゆく國民の體格及び健康に有之候。此三段亦材料豊富多言を省略いたし申し候。我國民中、最も剛健なるは軍人にして軍人中の健康者は、統計の教ふる通り、實に吾等農民に有之候。勇健は吾等の專賣にして、清健なる吾等の血液は、此國家民衆を益ふ唯一の生命に有之候。

右の三つは、我祖先傳來の最も誇る可き寶物にして又吾等が人類の爲めに貢献すべき、最上至尊のものたるを信じ申し候。彼の青顔瘦軀の學者輩が、避暑地や避寒地に於て執筆せし農村救済論、何等の價値……權威あるものぞ。他を救ふには、他に優るの力なかる可らず。我清熱的詩人一茶翁、痛罵して曰く、

明月や江戸のやつらが何知つて

と。救はるゝものは大なる恥辱なり、救ふものは永生の名を得。吾等は彼の一家の抱負を持して、自ら、自らを救ひ、更に進んで、此民衆を救済せざる可らずと信じ申し候。

小生此程生物学、及進化論等を少々研究仕り、吾等が責任の、更に重大なるを感じ申し候。生物の進化、退化、盛衰等には、一定の理法ありて、此理法より推論する時は、吾等人類も、早晚滅亡の時期到来す可き事を信ぜざる能はず候。抑人類が他の生物を征伏して、地球上を占領するに至りしもの、實に他の生物に優越なる智力、體力、共同力、武力、繁殖力等の存在し、發達したるが爲めに候。而して智力、武力、繁殖力の著しき進歩は、益々人類同志の競争を劇甚ならしめ、且人類の共同生活に對する負擔を加重し、随つて生活を困難ならしめ、亦一面に於ては、

器械力の發達に連れて、人類の體力健康は日夜に衰へ、亦分業の爲めに體格は偏頗なる發育をなし、學者は自然を征服すと誇れ共、吾等の身體は彌々自然に征服せられて抵抗力は薄弱となり、加之、各種の病菌に侵さるること著しく相成り申し候。想ふに皆是人類退化衰亡の現象と申す可きか。而して此衰運に向ひつゝ、ある人類の間にありて、益々雄大なる氣宇と、剛健なる身體とを造り、全人類の爲に、單に衣食住の必要品を提供するのみならず、更に進んで、最も清健なる血液を送りて、滅びんとする此人類の歴史を、一日たりとも長からしむるもの、實に天が我農民に與ふる使命にして、我天壤無窮の皇運を扶翼し奉るも、茲に於て始めて有意義たる可きを確信仕り候。

我忠勇なる軍人が、軍旗の翻る處最後の一人となる迄奮闘する如く、

此光榮ある人類の歴史を越けて、最後の一人となる迄、次に興る可き他の生物と力戦するものは、獨り我農民（殊に大和民族の）なる可きを思へば、快感自ら禁する能はず候。乍去、我農村を觀れば、智と金とは依然として缺乏を叫ぶ。此段大に吾人の力闘を要すること、存じ候。

要之、農村救済の事、唯吾農民をして義農作兵衛たらしむるに在り。乃木將軍は武士道の權化ならば、我作兵衛は、實に我農民道の典型にして、我農村の青年は、擧げて作兵衛の碑前に参拜す可きものと、悟了仕り候。快男兒作兵衛を、我農民の間に出世せしは、吾等の千歳に誇る可き處、而して先生に依りて、尊き農人格を知る事を得たるは、小生の感謝に堪へざる處に候。

農村の實際

愛知縣は縣の位置から謂つてもよい所である、就中幡豆郡と云へば縣内で富裕な郡であるが、其處に三和村と云ふがある。明治卅九年に三箇村が合併して今の名をつけたのであるが、其名の如く舊村根性もなく至極穩かな、而も治りのよい村である。故に農村の中でも先づ以てよい村柄と云ふて間違のない所であらう。

戸數は九六九戸であるから小村ではない、其内川崎部落は三四四戸であつて、元一村をなして居つた所であり、既に耕地整理も完成し、十年前から産業組合も出來て居つて、人は模範部落と稱して居るのである。其處の組合長である齋藤元治郎と云ふ人は、至極眞面目で而も緻密な頭

腦を持つて居り、改良事業と云へば率先する性格であるから、部落の人

もよく歸服して居るのである。去年は副業である養蠶の成績はよく、米の相場もよくなり、爲に何れの農村も喜むだ年柄であつた。別けて此處は凡てが順調であると人も謂ひ、自分でも思つたと云ふが、尤もと思はるゝのである。

然るに齋藤氏は、十一月に縣下井に京都三重地方を視察して感ずる所あり、組合の幹部連中に謀つて部落の經濟調査をしたが、其結果實に意外の成績に接したのである。即ち川崎部落は

収入合計

十四萬六千九百七十八圓三十四錢

支出合計

十五萬七千三十七圓二十五錢

收支差引

一萬五十八圓九十一錢 収入不足

此額を部落現住戸數三百四十四戸に割當つると、一戸平均二十九圓二十四錢の収入不足となつて居るので、全く順調所ではなく、寒心すべき現狀であるを發見したのである。同時に其原因を探究して、部落の耕地が漸次他町村に移出することが分り、既に部落の耕地全面積の六分の一は他町村有となつたことまで明かになつた。其處で川崎部落は覺醒して、之を村當局者に持出し、一村を警戒することにしたが、其後村内有力者の會合となり、村内を通じての調査となり、其善後策の講究となり、目下何れも夢の醒めた様な風であるのである。

因つて吾輩は思ふ、愛知縣の如き地の利を得たる所に於て、而も天恵と人和とを得たる農村に於て、且つ昨秋の如き空前の農産物價騰貴を得て、尙收支相償はざる結果を示せりと云へば、經濟上有利の地にあらざ

る、人和と村治との上に於て、幸福を得ざる多数農村に於ては尙恐るべきものがあるではなからうか。昨年より本年にかけて景氣の回復せるを喜び、自家収入の殖えたるに安心してよい氣になつて農村は多いが、果して喜ぶべきものであらうか。吾輩は此際農村の正確なる調査を経たる實際を知り度く思ふのである。吾輩は農村將の爲めに、農民自覺の機會を得んがために、衷心農村の實際が今少しく眞面目に研究されんことを希ふものである。

憐むべき三農

憐むべき三農とは、一に曰く惰農、二に曰く愚農、三に曰く迷農である。

惰農は労働を忌避する百姓であり、小成に安んずる農民であり、向上の志なき農業者である。大にしては國家の興隆に對して累をなし、國民の發展に對して禍を及ぼし、小にしては地方の繁榮を害し、農業の進歩を阻むものである。故に世に容れられず、人に嫌はるゝものなれば、當人の不幸も多大なるべきに、尙改むるを自覺せず、人より誠しめられても悟らざるもので、其怠惰は既に性となつて居るとでも云ふべきである。過日福井縣に旅行せしに、昨年末の米價が稍高かりしとて、はやよい氣

になりて、相当收入を得べき繩絢等の副業を止めた者が多いと聞いた。又愛媛縣に來ては僅の小作米を減じて貰はんとて、貴き時間を空費して平氣な者が居るとも聞いた。如斯は所謂惰農の本性をよく發揮したる者で、憐むべきの至りである。

愚農とは日進の學理を辨へず、月歩の技術を修めず、文町の利器を利用せず、亦辨へんとも、修めんとも、利用せんともせずして、徒に舊習に囚はれ、古來の慣習を墨守して知らず識らずの裡に退歩し、漸次に世の中より後れて、果ては農業は利益なき仕事であると愚痴を去ひ、百姓は儲からぬものだと嘆つて徒輩である。之が爲農民の面目を損じ、國産の増加を得ざるに至るのである。今日各地に於て尤も多きは、恐らく此種に屬する農民であらう。而も小農よりも寧ろ地主者に此種の多いのは

農業の他業に比して進歩せず、農民の他の業民に比して信用なき所以であるまいか。特に今日に於て五町や十町歩の土地を所有するものが、當年の如く地主然として威容を張り、地主氣分に充ち居る圖は、眞に愚の至りである。彼等が今更鋤鋤もつを品位が下るものと解し、勞働にいそしむを賤しきこと、恥づるが如きは、愚亦骨頂と云ふべきである。

愛媛縣の一角に於ては、昨年の如き豊年に際してさへ、地主と小作間に圓溝を缺き、今以て小作米の納入を見る能はざる珍事がある。其區域は二三十箇町村に跨り、事態容易ならざるものすらある。而も双方暇を潰し、金錢を浪費して、未だ其弊を悟る能はず、悟つて尙且つ解決する能はざるが如きは、眞に恥づべき事の限りであるが、當事者それ之を思はずして、互に氣勢を張り居るが如きは、其愚や及ぶ能はざるものであ

る。迷農とは利に迷ひ、形に迷ひ、勢に迷ふものである。株で儲かると聞けば株に馳せ、相場をやるが利なりと言はるれば相場に手を出し、何でも利のある仕事が良いと信じ、儲かる仕事は結構と思ふのみで、己が家業によつて利を上げんとし、儲を出さんと工夫せず、而も株の暴落によつて損を招き、相場に失敗して手を焼き、今更後悔するも逐付かぬ憂き目を見るの類は、皆之れ迷農の運命であるが、其處に悟る能はざるが、迷農の迷農たる所以である。

同じ働くなら形の良い方がよい、百姓は泥に塗みれ肥に浴し、粗衣を纏うてせねばならぬ仕事なれば、如何にも気がきかぬことなりとし、其獨立自營の出來る貴さに考へ及ばぬも亦迷農である。商工業の羽振りの

よきを羨み、商工民の派手な仕方に感心し、何でも勢のよきに従はずば男子の面目も立たぬが如く思うて、農業が神の業なるに想到せぬも亦迷農の一種である。

時局以來、各所に著しく増加したのは迷農であり、都市に走る農民の多くも亦迷農である。

地方は以上の三農によりて萎微振はず、疲弊益甚だしきものあらんとするは、眞に國家の不祥事である。今や地方改良の聲は上下を通じて喧しく、其事業も亦眞摯に經營されんとするに至れるは、不幸中の幸とでも云ふべきなれど、吾輩は所謂憐むべき三農を退治し、之を啓發改良するに非ざれば、地方改良の實績は容易に上るまいと思ふものである。故に吾輩は地方改良の先決問題として、憐むべき三農を指導啓發せんこと

を提唱するのである。

善次郎翁

兵庫縣宍粟郡山崎町に前野善次郎と申す篤志家がある。本年六十九歳と聞くが、頭髮や髯の白さが雪を欺くばかりなるを見ては、成程老人かと思はるゝが、言語の明晰なる、態度の確固たる、動作の活潑なる、意氣の盛銳なる、壯者も及ばぬ程である。聞説翁は、毎朝町の裏山を散歩するを缺かさず、毎晩龍野街道を運動するを怠ることなく、而も家族親類は勿論、町内の人の込入たる問題の相談事や、心配すべき問題の解決は、毎日豫定の二時間内に於てし、決して他の時間を之が爲に費すことなしと云へば、内外の人者之によりて時間内に來集面接すと云ふが、面

白き日課ならずや。一面上述の如き運動を怠らず、規律的の動作をなし、一面無駄な飲食物をとらず、遊戯をなさぬ主義を確守するが故に、家は富豪ならずと雖も、公共に盡くし、公益を計り、慈善に心を廻すは、遠く富豪を凌ぐものありと云ふは、不思議なことではないのである。今翁の多年心盡くしの成績を擧ぐれば、町民を指導して勤儉に努めしめ、毎日五錢づゝ貯金をなさしめたるものは、今や資本金二十萬圓の勤儉銀行となり、地方唯一の金融機關となつて居り、地方改良の趣意を以て有志を集めてなりたる興益會は、時間確守を標榜して、今や町内の葬式時間が一固定したるのみならず、贅費の無駄が皆無となり、將來の國民養成と低級の現町民啓發とを目的として、毎年十二月二十五日に於ける小學校の終業式に發表する「いろは」歌は、昨年の末にて十九首に達したのであ

る。今右十九首を掲ぐれば、
 い、今が大事ぢや孝行しやれ、二度とこぬぞへ今日の日は。
 ろ、ろくに課業も出来ない癖に、とかく衣裳は派手このみ。
 は、腹のうちより勉強さんせ、うはべばかりはみともない。
 に、西の國にもまけないやうに、はけめ學問をこたらず。
 ほ、ほつておいては珠玉も瓦礫、日々に見がいてつやを出せ。
 へ、へいぜい往生なまけた生徒、試験紙見て青い顔。
 と、とかく友達えらむが大事、麻の中なる蓬見よ。
 ち、ちりをしらべよ世界の地理を、島嶼根性をやめにして。
 り、りん機應變司馬温公も、人のためには斐をわる。
 ぬ、ぬすみ根性はうそより起る、嘘は我が身の仇敵。

る、るすといへとてかくれる親に、いけんするのが子たる道。
 を、をしへこんだら犬でも状を、もつてゆくぞへどこまでも。
 わ、ワットその名を世界にあげて、國を益する蒸汽力。
 か、家内仲よく育つた子供、行儀作法もおのづから。
 よ、世にも貴き時間とおかね、むだにつかふな生徒から。
 た、たまも黄金も貴いけれど、それにうへこす人の道。
 れ、れん木といふたらすりばち出しやれ、のみといふたら鋸を出せ。
 そ、そろ盤もつ手も鋤鉞とるも、みんな身すぎの種ぢや哩。
 つ、常にたしなめ試験にせまり、いくらあせるもそれや駄目ぢや。
 右は五十歳の時に始めたりと云ひ、年に一首宛なりと云へば、四十八
 の歌が完成するは、翁が九十八歳の時である。翁は自強不息、之を完成

するの意氣と用意とを示して居るのは、誠に當世の珍寶である。而も尙翁は裏山を餘裕の生ずるに従うて買収し、餘暇自ら出で、樹木を植ゑ、道路を開きつゝあるが、それは町民の爲めに寄附すべき公園の準備なりと云へば、翁の志や貴く、翁の功德は大なりと云ふべきである。翁は特種の人にあらず、皆人の學んで到るべき達せらるべきものであるを思へば、吾輩は世の多くの人に之に則らんことを勸奨し、同時に何れの地方でも斯る人の一人を得たらんには、其幸福と功德との大なるを思つて、斯る人に満腔の敬意を表すべきを希ふものである。

處世の三要

世の發達するにつれ、時の進歩するに従うて、困難を感じ、厄介にな

るは、所謂世渡りの道、即ち處世の方法であらう。人多くなれば競争が激甚となりて優勝劣敗が顯著となり、事繁くなれば迷惑すること愈多くなりて淘汰は益深酷を極むることゝなるは、免るべからざる自然の結果と觀念せねばなるまい。故に人は世渡りの道を講じ、處世の方法に専念工夫せねばならぬことになる。榮達する人は即ち斯の道を知れる人であり、出世するものは即ち其方法を得たるものである。されば今の世に於て、人に其道を教へ、其方法を説くは、蓋し功德の大なるものあるは、疑を要せぬことと思ふ。

夫れ世渡りの道には三つの心得がある、名けて處世の三要と謂ふ。其の一は想であり、其二は識であり、其三は行である。而も人目に觸れ、人の注意を引くものは行であり、行を左右し上下するものは識であり、

識を善惡に働かしむるものは想であるが故に、人皆の心せねばならぬは
想が第一である。

想は思想のことであり、單に精神と云ふこともあり、又心と謂つても
よいのである。考へ、主義、信仰、本來の眞面目、意見、志思、念慮な
ど稱ふるは、此の内に包含さるゝものと見てよいのである。總じて想は
高尚にし、遠大にし、正善にむけることが大切である。斯く想の向上に
努力するを精神修養と云ふのである。故に精神修養の功が積めば、其處
に想が高尙となり、遠大となり、正善の方向に働くことに自からなる。
換言すれば、常に高尚なることを考へ、遠大なることに志し、思邪なし
と云ふことにならねばならぬのである。

若し想が墮落すれば、即ち下卑た考のみする様になり、目前のことに

のみ囚はれて將來の慮をなすことが出来なくなり、悪いことを企み、
悪い様に何事をも解釋する様になるものである。今の世に於て憂ふべ
き事は多けれど、我同胞の思想の墮落ほど憂ふべきはあるまい。悲し
むべきものも多けれど、我民族精神の向下ほど悲しむべきものもない
のである。

精神修養に怠らず、常に想の向上に心がければ、善いことが考へられ、
正しきことに思が馳せ、遠慮することが出来る故、自然快活な氣分に充
ち、勇氣に富み、發奮興起の精神が旺盛になるものである。其處に人格
も生じ、氣品も認められ、人柄もよくなる。之れ精神生活をなす人は何
時も貴ばれ、想の人が何處に於ても凡俗を超越する所以である。故にわ
が國民の自強息むべからざるは精神の修養であり、我民族の益努めて倦

むべからざるは想の向上をはかることである。職は知識であり、理解し、判断し、意識する事である。學問すると云ひ、研究すると云ひ、講習すると云ひ、修學すると云ひ、經驗すると云ふ等、皆之れ知識を得るの方便である。今日の世の中は、理解する力に乏しければ後を取り、學理を辨へざれば無駄をすることになり、判断推理することが十分でなくば迷ふことのみ多くなる。故に今の人は、何人も學問に怠らず、政府も社會も智育に重きを置きて、之がために各種施設をなして飽く所を知らざるの觀がある。實際亂麻を斷つのは快刀は智であり、盤錯節を切り拂ふ利刀は識である。されば一寸前は暗の世渡をする燈明たるものも、亦知識である。智の偉力、職の功德や、大なり矣と謂はねばならぬ。

然も高尚なる想より出て働く智でなくば善智たることが出来ぬ、遠大なる志に伴ふ識でなくば達識たるを得ぬ、正善の精神方面に活動する知識でなくば、難有、貴き功德は顯はれぬものである。世を益し、人を濟ひ、物を生かす善知識と、之を得んと欲する善手段とは、皆向上的思想に伴ふ結果に外ならぬのである。今の世は想の墮落により、知識は悪く働き、智慧は下卑た方へのみ動き、爲めに油斷がならず、面白からぬことの多くなるが、通弊ではあるまいかと思ふ。或は巧みなるを得るも巧詐多く、或は學べるものと認めらるゝも曲學なるが多い。我國に於て特に甚だしきを感じるの恨みがあり、我民族に其傾向の盛なるを見るを遺憾とする。行は行爲であり、行狀であり、動作であり、働き振であり、勤勞であ

り、活動であり、努力の様でもある。故に人の目に映じ、感情に觸れ、事物に影響する直接なるが行である。人の品位を認めしむる禮儀作法も、事功を上ぐる奮闘努力も、經濟國民の活動も、勤儉治産の行動も、忠實服業の精勵も、皆それである。而も行に識の伴はずば、成績を上ぐる容易ならず、又功果も大ならず、功德も普からざるが常である。同時に向上的の想が根本であり、原因でなくば、神聖、貴、偉大なる名稱を附する働が出来ぬのである。夫れ一夫の耕も、一婦の織も、識深く、智多ければ、成績は驚くべきものがあつて、時に國を富まし、民を濟ふことも成し得るものである。其の志す所國家に在り、其思ふ所民衆の福利にあれば、一夫一婦の努力と雖も、偉大にして且つ尊貴なるを得べし。故に善行は善知識によりて價值を大にし、善知識は善想によりて深遠なる

を得るのである。

現代の弊は、想の墮落に因つて人の働きが卑劣となり、識が悪く働きて悪事をなすことが多くなることである。譬へば富を得るは巧者なるも、富を公共公益を増進するに使ふことが出来ず、事をなすに賢なるも、世を益し人を救ふことが出来ず、事功を上ぐることも多きも、徒に利己の爲めなるが多い。或は他の名譽を猜み、榮達を嫉み、出世を妨けるが如きを敢てして恥ぢとせざる風潮もある。或は權勢を爭奪するに汲々として國家に累を及ぼすを顧みず、地位を争ふに懸命で禍を民衆に及ぼすを意とせず、私見に囚はれて害を公衆に輸たすを辨へぬ事實も、多きを加へて来る傾向がある。如斯して我民族の信用を低くし、我國民の價值を下げ、我から我の權威を傷くる愚をなすことが多いの

は、眞に悲しむべく、憂ふべきことの極である。
行は見る所によりて品評することが出来、識は試験によりて多少を知
ることが出来るも、想は見分らず、試験もし難きものなれば、兎角注
意を缺き、警戒を怠り、用心も忽せになり易い。故に何時となしに、想
は低くなり、狭くなり、小さくなり、目前のことに囚はれ易くもなる。
之れ處世に艱難を感じるものが多くなり、世渡りに難儀するものゝ多き
をいたす所以ではあるまいか。吾輩時事に感ずる所あり、敢て處世の三
要と題して、世人の反省を促すと云爾。

婦 人 會

福岡縣の築上郡は、其名の如く、比較的固い根柢の上に築かれたる多

くの團體を有して居る郡である。就中婦人會は他に比して、確に一頭地
を抜ける感がある。今年五月十五日に、郡婦人會幹部大會が開かるゝと
云ふので出席し、其實際を見て、喜びもし、難有も思ひ、感謝もしたの
である。

我國の現情は、最も婦人の覺醒、婦人の向上を要求して居る。國民の
訓練陶冶が男子に偏して居る今日に於て、婦人を訓練し、婦人の自覺を
促し、婦人の向上をはかるは、國民を進歩せしめ、國家を強大にする唯
一の道である。然も此種の運動が、婦人の間にも起らず、男子の手にも
試みが尠いのは、我國家の不幸ではあるまいか。とは吾輩の意見であつ
て、之がために我微力をいたさんことも亦年來の希望である。故に偶訓
練されし婦人會を見ての吾輩の感想は多大ならざるを得ず、又た他に之

を推奨せざるを得ぬのである。

當日の築上郡婦人會幹部大會は、第五回目である。遠きは六里許りの山の中からも集るのであつて、前回と同様なりとて五百名を數へた。以て郡婦人の意氣を窺ふことが出来るのである。午前九時半から開會と云ふに、會員の全部は悦んで集つて居つた。以て如何に規律的の訓練が行届き居るか分るのである。式は

国歌の合唱 勅語奉讀 式辭 事務報告 表彰 協議 訓辭祝辭 講演 答辭 閉會の辭 餘興

を以て終始したのであるが、お婆さんも、主婦も、娘さんも、學校の女教師も、皆一同国歌を合唱した時は、言ふに言はれぬ難有さと勇さとを感じた。協議は

一、敬神崇祖の志を厚くする爲め、左記事項を實行すること。

イ、父母の命日には必ず其墓に詣で、尙毎朝神佛に禮拜すること。

ロ、町村を遠く離るゝ時、又は歸郷したる時は神社に參拜すること。

二、大正六年秋期施行の修養會は、各町村共一回は當該町村婦人會本部主催の下に開會することとし、講師の選定に意を用ゐると共に、

開會方法は従來のものに適當の改正を加ふること。

従來部落のみに開會せしを、町村を單位に、一回は開く様にとのことである。

を議決して、爾來各婦人會員は實行することにしたが、蓋淳厚なる俗をなすであらうと思はれて、床しくもあり、結構にも感じた。講演は略一時間半であつたが、何れも靜肅に聞いたのみならず、其主要なる點に向

つては首肯して同意を表し、或は實行の決心を示すことが十分であつた。斯くして精神上又は思想上の鍛錬向上が出来たのかと思へば、眞に望ましく、頼み甲斐のあることと思つた。餘興は中飯後會場附近の劇場で興行しつゝあつた鏡山實記を見せることであつたが、娯樂に比較的饒る居る田舎の婦人には、之れも平日の勞を慰して遺憾なく見え、よい思付と嬉しく思つた。斯て大會は午後四時半滞なく終へたが、天も比企を賛成してか、此日は風なき雲なき、所謂日本晴であつた。

開説、築上郡婦人會の基本金は、大正五年度に於て五千二百六十七圓支部一、四〇六圓を算へ、三百圓以上の基本金を有する町村支部會が六、本部三、八六一圓と云ふことで、其基礎は蓋強固になりつゝある。事業として補習教育を奨励し、毎年廿一日間が決議されて居つて、決議通り

施行したのが六箇町村、其他は決議通りには出来ないさうだが、大正五年度の補習教育を受けし延人員は二萬三千三百廿八人と云ふのである。講習講話は、婦人に必要な精神修養に關することばかりでなく、料理、洗濯等の實科に關するものもあるから、本郡の婦人は幸なりと云はねばならぬ。尙風俗の改善をはかるべく、勤儉の風を助成して、質素と利用とを奨励し、淳厚の俗をなすべく敬神崇祖の禮を厚うすることに努めつゝありと云ふが、難有くも結構なことである。

福岡縣は由來教育に重きを置き、教育にかけては、東に長野縣あり、西に福岡縣ありと唱へられて居るが、吾輩は其實際を見て、其事の偶然でないのを感じると同時に、婦人會並に會員に多大の敬意を表せざるを得ない。さても望ましきは堅實なる農村婦人會なる哉。

慈悲は慈悲を産む

北陸道は、佛教の感化盛にて、比較的安心立命の生活をなすもの多く、爲めに犯罪者も少き所なるが、僧侶の多くが徒食安眠して時勢に覺醒するもの、尠きも亦他に類例のなき所であつた。

時局以來の事件は、上下の間に阻隔を生じ、兩者の意見が相反し、利害が衝突する機会を多くし、甚だしきは帝國の將來に面白からぬ影響を及ぼすべしと、憂慮に堪へぬこともある。就中下級者に對し、防貧、救貧の手段と方法とは、國家としても、團體としても、又た個人としても、是非講究せねばならぬ場合となつた。此時に際し、慈悲を旨とする佛教僧侶の奮起は、其職分を盡くす上よりしても、佛の慈悲を表はす上から

しても、尤も望まじきことである。

富山縣の水見郡は眞宗の盛なる所であり、今までは情性に因つて佛教の維持が出来て居つた所であるが、時局以來、若き僧侶の間に覺醒の曙光が見え、昨年四月より、救濟事業の資金を得べく、水見郡慈善托鉢會が組織され、毎月一回必ず有志の僧侶は托鉢に出ることとなり、本年五月までに淨財の集まりしもの、正に八十圓六十九錢二厘となり、水見郡長之を保管して、今や使途を研究しつゝありと云ふが、功德の下級者に及ぶことも遠かるまいと思ふ。慈善托鉢會が出来て、地方有志の人に、或は印刷物を寄贈するものが出来、或は喜捨せんとて節約を旨とするものも出来て、今や一善萬善を生むの傾向ありとは、地方否國家の爲め芽出度からずや。

佛教會の活動

愛知縣の海部郡は、土地豊饒にして、交通の利便多き所なれど、動もすれば地主者と小作者との間に紛擾を生じ、凶年にまさる凶作を招き、比隣にして尙千里を隔つるが如き人心の阻隔を生ずることのある所である。

此郡は眞宗の盛な所で、而も裕福な暮しをする寺院の多い所であるが、従來生じた地主小作者間の紛擾には没交渉であつた寺院僧侶は、殆んど全部であると云ふが當然であつた。然るに時局の刺戟か、時勢に覺醒したのか、此郡各宗派を統一したる佛教會なるものが、昨年來宗派僧侶の間に組織され、(一)僧侶の修養(二)地方に貢獻を二大標榜として、毎年總會

を開き、善智識の講談を需めて修養に資し、農會技師の出張を仰ぎて農村農業の状況を聴いて啓發する所あり、郡當局者より郡の狀勢郡治一般を聞いて、各自努力の打合をなしつつあるは、誠に僧侶のためにも、地方の爲めにも、亦國家の爲めにも、喜ぶべきことである。勿論創立日淺く、未だ事業の見るべきものなれど、之が人心に及ぼす影響の尠からざるは、總會に出席する僧俗人の多數なるに徴しても知ることが出来るのである。兎角無用の長物視せらるゝ僧侶が、斯くして地方に貢獻し、人心融和の衝にあたるを得ば、信仰の尙亡びざる地方のこととして、何等か功德を見ることであらうと思はれて、帝國將來のため欣幸の情に堪へぬ次第である。

夏期の講習

夏期休暇と云へば、休息をなし、静養を旨とするが原則なるべけれど、時勢の要求か、現代の風潮か、到處各種の講習會を見ること、年を逐ふて頻繁の傾向があるは、國の爲め喜ぶべきか、又悲しむべきか。既に講習會を開催する以上は、苦熱と戦ひ、情氣と闘ひ、倦怠の氣と勝負を争ふ的の覺悟でやりたきものである。吾輩は知識の啓發に資するよりも、寧ろ身心練磨の實修、實踐を主としたいと思ふ。講師たるべき者は、聴講者の精神を緊張せしめ、眠らんと欲して眠る能はざる、激刺たる元氣と話術とに工夫し、聴講者は暑熱、倦怠、苦痛と戦うて、緊張したる精神の持続に工夫せば、我現代の弛緩せる風潮を改善し、萎靡せ

んとする精神界を刺戟するの功德は、蓋し知識の向上にまさる千萬ならんと信ずる。世の多くの講習會が、皆斯くあるべきを、吾輩は國のため希望して止む能はざるものである。

此心は國寶

悪事は千里を走れども、善事は兎角一步を出でざるは、面白からぬ世の様とも云ふべき哉。愛知縣西加茂郡に藤岡村と云ふがあり、其處の尋高校長に今井清助氏と云ふ、珍らしき眞摯なる人が居る。同人間に今井氏の謙嚴、眞面目なるは評判にてありけるが、知恩報德にかけて、現代稀に見る人なるは、餘り多く知られて居らぬは、所謂善事一步を出でぬ例にて、誠に聖代の

遺憾事である。

氏は郡内に有数の教育家なれば、大正四年の御即位式當時には、召されて賜饗の席に列する光榮を有したのである。斯る光榮は所謂一生一代の慶事にて、吾等も終世忘ること能はざる印象を得た一人なのである。氏は此光榮を深く感ずると同時に、身の幸福を喜び、喜ぶと同時に、今日あるは、生みの両親と教への師との御蔭なりとて、今更両親の恩と師の恩の高大なるを思ひ、厚く其恩に感謝したのである。

父母の恩、師の君の恩を感じては、今此光榮を獨り吾身のみ荷負ふに忍びずとなし、何とか之を願つ工夫もがなと熱慮の結果、親の肌着をつけ、深田なる舊師の家に驅付けて其の志を述べ、深田氏のチヨツキを借り受けて、其上にフロックコートを纏ひ、両親と師の君とを同道す

る心持にて、賜饗の席にと列席したりと云ふ。さて賜饗の席の果てし後、己が郷里は名古屋を距ること八里餘りなるに、一時も早く賜饗の物を両親と師に捧げ、其喜びを共にせんとて、所謂とるものもとりあへず駆け歸り、先づ師の君に初穂を分ち、其餘を両親始め家族に頒ちて其光榮を共にし、此れで結構なり、満足なりとて、再び夜を徹して名古屋に歸り翌日の祝賀會に列したりと云ふ。

吾輩は此話を、過日漸く深田氏に聞いたのである。感泣して喜び話す深田氏の話には、吾輩も嬉し涙を流したのである。

嗚呼、今井氏の一片報恩の心は、眞に國寶なる哉。今の世、徒に金銭に腐心して知恩の跡なく、利己に孜々乎として報徳の心を見るに由もなき様なるに、茲處に今井氏あり、以て聊か人意を強うするに足ると思ふ。

則るべきは此の事

愛知縣東加茂郡に盛岡村と云ふがある、此處の役場には珍らしくも佛壇が安置してある。何の爲めなりやと云へば、此村に盡瘁したる故人の靈をまつりて、長く其徳を偲ばんが爲めなりと。如何にそれが取扱はれて居るかと云へば、役場へ出入のものは必ず其處に拜禮をし、村會の當時、議員は會議を始むるに先だち拜禮をすると云ふ。之れ故人の徳を感じ謝し、皆其志をつがんことを思ふ爲めなりと。如何に之れが利用さるかと云へば、村内有志は當局者と共に、嬉々其前にて自治の工夫を論議し、自治の事業を相談し、自治の進歩について意見を戦はすが、各自故人の靈前に於てすれば、自然眞面目の氣分になるとのことである。

吾輩嘗て、鳥取縣西伯郡の上道村に至り、此處の役場に祖靈社を設けてあるを見て愉快に感じたが、佛壇を安置せるを見るは茲處が始めてある。之と夫とは神佛の相異はあるが、其精神の存するは同功である。兎角、自治のことに眞面目を缺き、動もすれば字や部落と反目して一致の行動が出来ず、甚だしきは故人の事業を破り、其面目を損する所の多き場合、盛岡村の企は、則るべき事ではあるまいかと思ふのである。更に、愛知縣丹羽郡で此秋施行せる自治祭も亦面白いことであつて、則るべき事とする。

同郡にては、郡長祭主となつて、郡内各町村の、自治に貢献した多少を論せず、苟も自治に公務を取た人の靈を祭たことである。地下に眠せる故人の靈が慰められしのみならず、現に町村公共の爲に働ける人に多

大の刺戟と感奮とを與たことは、看過すべからざる事實である。自治の事は、徒に法文の示す所にのみ拘泥すべきものではない。規則づくめで成功するものでもない。所謂人心の機微を囚へてなすべきことをなさねばならぬものであれば、斯ることは何れに於ても則るべきである。

世に稀なる孝女

廣島縣産品郡有磨村大字上有地の荒川カヲは、資性素言柔和にして品行方正、家業に勉勵し、克く父母に仕へて孝、兄弟に交りて友愛、隣保の交際親切にして、衆庶の行ひ能はざることを行ひて庶人の敬愛を受くる等、衆人の模範とするに足るもの多きを認む。今其の行爲の優秀なる

事實を左に列記すべし。

カヲの老母ナツ（本年六十四歳）明治四十二年霜月四日惡寒發熱により病床に臥し、漸次増悪して危篤に瀕せしことありしも、醫藥効を奏し數箇月にして快方に向ひたるも、此の時より筋骨の變化を來し健麻質斯病となり、身體起居の自由を失ひ、他人の介抱を受くるに非らざれば用便を達する能はざること九箇年間なり。之れより先き大正四年六月、俄然眼疾を患ひ、醫療を受け、氷を以て極力冷却すること四十日間にして劇痛は止みたるも、全く眼識を失ひ、盲目となれり。爾來一層介抱に手敷を要することとなりたり。

病褥にある者が老若にして外出を爲すこと能はざるときに當りては、外間の事情、家業、家庭經濟等の事情を聞かむと欲するの心情切なるは

古今其様一なり。然も普通一般の者は、之を面倒なりとし、親切に語る者少なし。然るに孝女カクは毎日田圃に出で、耕作中午前中二回、午後三回は必ず帰宅して何處迄植付を終了せり、何處迄刈り取を済した、施した作況は「ドーダ」とか、丁寧親切に病母に談話するを常とせり。雨天其の他外出せざる場合は、老母の傍に坐して小説雑誌の類を借り集め之を讀みて聞かため、珍らしき事柄は特に説明を加へて、細大洩さず談話して慰むるを例とせり。又地方に於て芝居神樂其の他諸興行ある場合は、必ず背負ひて出で行き慰安を與ふるを常とす。

僅麻質斯病者は入浴を欲するが故に、浴場の設けなかりし以前は、隣家に於て湯を沸す毎に背負ひ行きて入浴せしめたり。其後浴場を設くることを得るに至りては、多忙の時にも二三日毎に入浴せしめ、丁寧親切

に洗滌して身體を清潔ならしめ、心神の爽快を覺へしめたり。斯くすること九箇年間の久しき、終始渝ることなし。父源太郎は性短氣にして疴癖あり、家政の不如意と妻の病床に呻吟するの状を見て、時々忿怒の聲なき能はず、斯る場合は父母の中間に立ちて克く之を慰藉し、且つ諫めて堪忍せしめ、其過誤を一身に負擔し、嘗て家内に風波を起さしめたるをなし。殊に洗濯に注意し、病衣は屢々洗滌して、嘗て母に汚れたる衣服を纏はしめたるをなく、頭髮は病床にある者の常として亂れ易きものなるに、隔日位には必ず櫛りて一絲も亂れしめたるをなし。排便は晝間午前二回、午後三回、夜間三回位を常とす。晝間は別に苦痛とするに足らざるも、夜間の三回は、年中間斷なく之を行ふには、何人も交代によりて處置すべきこと常なるに、一回として他人の手に委ねたるをなく、

自ら擔任して、九箇年間の久しき今日に於て流ることなし。
 明治四十四年六月、兄膳一監獄看守奉職中、其妻死亡の時長女九歳、
 二女六歳なりしが、父の手にて養育すること能はざるを以て、茲に子を
 引取りて病母の介抱と幼者の教養とに一方ならざる辛苦の間に其の任務
 を完了したり。兄膳一は之が爲に本分を盡して職務を完うすることを得
 たりと云ふ。長姉三人あり、何れも嫁して、家に在らず。此長姉等集
 合の場合、談偶と病母の介抱に及ぶ。曰くカクが家に在りて介抱して呉
 れるから吾々は安心して居ることが出来る。カク曰く、母の介抱は私の
 務なり安心せられよ、私は母上の在る間は決して嫁はしません、自分
 が幼時の養育の恩を思へば、是位のは九牛の一毛だにも及ばずと。姉
 等愕然として言ふ所を知らざりしと。カクは容色美貌、而も健全にして

婚嫁を迫る者あるも之れに應ぜず、將に二十六歳、婚期を過るも、病母
 の在世中は決して婚嫁せず、孝養を盡すあるのみと。偶々美味を貰ひ受
 けたる時は悉く母に與へ、自ら之を食したることなしといふ

歐洲戦亂の教訓

歐洲戦亂の當時を、便宜上時局と云つた。今日は時局過ぎ去つて、所
 謂戦後經營にとりかゝらねばならぬ時となつた。吾々は其戦後の經營を
 なすに當り、如何にすべきやを考へねばならぬのである。それには時局
 の教へたる所に鑑みるが賢い方法であると思ふ。之れ此教訓を公布して
 世人の参考に供する所以である。
 時局は最善の教師なり

大正七年の八月下旬に調査したものによれば、戦争に参加した動員總数は略三千五百萬人、其内死亡せしものは七百萬人、廢兵となりしもの五百十二萬人餘、而して之に費したる戦費は略參千百拾貳億圓(壹圓紙幣で勘定して五千九百二十一年間かゝるといふ、以て其數を想像すべし)なりと云ふが、夫れ丈け大きな犠牲を拂ひ、月謝を出して得た先生が、即ち時局と名乗る教師であるから、吾等は古來これ程權威ある教師に接したことがない筈である。故に時局は最善の教師であらねばならぬ。

時局は何を教訓せしや

教訓は多種多様である。其重要なものを上げれば

- 一、今までの文明に缺陷ありしを指摘した
- 一、社會組織の不備な點を教へた

- 一、國際關係の薄弱な點を指示した。
 - 一、協同の如何に強きものを教へた。
 - 一、專制や專政の如何に恐るべきかを示した。
 - 一、小國や未開の國の哀はれさを悟らしめた。
 - 一、社會本位の如何に大切なるかを教へた。
- 其他は枚舉に遑がない。各人は須らく自己の境遇に應じて知らるべきであらうと思ふ。

吾等は如何に教訓を應用すべきか。

- 一、新らしき文明の建設に努力すべきこと。

是れには、其抱負と、抱負に伴ふ研究工夫と、夫れに伴ふ活動がなければならぬ。

一、社會組織の改善に努むること。
先づ手近き自治體の組織、自家職業の組織、一家の組織をよくすることに工夫せねばならぬ。

一、我國は飽くまで正義人道の實行に努むること。

先づ自己の改造よりして衆に及ぼし、國民の品位と實力と信用とを高めることにせねばならぬ。

一、何事をなすにも協同が出来る様努むること。

先づ協同心を進め、協同の功德を上げて、協同せねばならぬ氣分にせねばならぬ。

一、四民平等の徹底に努むること

立憲の本義を解し、權義の擴張をはかり、權利の行使と義務の履行に

遺憾なきを期せねばならぬ。

一、國威の發揚をはかり、國民の向上に努むること。

蓋帝國々體の擁護をはかり、上下心を一にして世界の平和に貢獻せねばならぬ。

一、多數を本位に利益幸福の開發に努むること。

公共のために、公益のためには自己を犠牲にする位の覺悟が出来なければならぬ。

言ふは易く行ふは難しとあるが、如上は特に其感を深くするのである。是れ自他に大に奮勵事に當り、懸命其務に努めねばならぬ所以である。

吾等は如何に覺悟すべきや

一、從來の我帝國は長短補足を國是とした關係上、何事の上にも獨創

的のもの少く、模倣的な事が多い、今日以後は獨創の心懸けを尊重し、發明發見は勿論、思想道德信仰の上にも獨立をはかりて、以て新世界、新文明の建設に貢獻する覺悟あるを要する。

一、從來の我帝國民は、所謂島國的根性に囚はれ、爲に小成に安んじ、目前の小利に満足した弊があつた。今日以後は大なる抱負、責務の觀念の下に能率の増進をはかり、以て世界的平和のために、人類幸福のために、功德を上ぐる覺悟あるを要する。

一、從來の我民族は、己れを清うし潔よくする特徴はあるが、同時に他を卑下し、人を惡口する癖がある。今日以後は自己の人格を貴ぶと同様に他人の人格を尊重し、自分の權義を主張すると同時に、他の權義を認むる覺悟あるを要する。

如上是今日我同胞の三大覺悟なりと高唱するものである。此覺悟ありて初めて時局の教訓を受け入れることが出來、我國威を揚げ、我國力を強うし、我國運を盛にし、押しも押されもせぬ第一流の國家となりて、世界をして則る所あらしめることが出來ると思ふ。敢て發奮興起を希ふ所以である。

賢き農人の資格

何れの社會にも賢き人と愚かな人とが居る。賢き人の多き社會は進歩發達し、愚かな人の多い社會は退歩不振に陥るは、東西軌を同うすることである。商工業の社會が勢よく、農業の社會が萎微するといふは、業に従事する人の賢愚に因るのである。故に國家の要求に應じ、一般社會

の期待に背かぬ様農界を改善するには、農民は賢くならねばならぬ。農人を賢き人にせねばならぬ。一人でもより多くの人を賢くすることが緊急のことである。此意義よりして、賢き農人とは如何なるものかを詮議して見よう。

一、固き信念がある。(迷ふことがない)

自己の業務に對し強い執着があり、自信があり、妄りに動かさず、迷はず、若し思ふ事ならず、計劃がはづれるならば、是は自己のやり方が悪いのであると己を責めて、更に修養研究して勇往邁進する。而して、遂に目的を果たす心得があるものである。

一、不斷の努力をする。(惰けることがない)

自己の業務に對し斷えず研究する、工夫をする。時には他の意見を聴

き、時には先進地を視察し、確信を得るまで試験をし、若しそれでも失敗すれば、更に方法を考へ、失敗の跡を詮議して改良し、遂に成功する根強き努力をするものである。

一、進取の氣象がある。(因循姑息の弊に陥らない)

よく時勢に鑑みて、文明の利器を應用し、理學の進歩につれて合理的に經營し、基礎を經濟の上に置いて無駄なことをせぬ用心し、常に日進月歩を己が業務に現さんことに、孜孜乎として維れども足らぬ氣分が躍如として居るものである。

一、着想が早く鋭い。(ほんやりしない)

眼が敏く氣の付き方が早く、爲めによく時勢の變化を察して準備が出来、人の嗜好を想像して用意をし、世の流行に先んじて計劃を立つるこ

とが出来るから、所謂「へま」をふむことなく、後悔することが少ない。それには常に見聞を博くし、講學を怠らぬ心掛があるものである。

一、経営が上手である。(能率が高い)

仕事のやり方が組織的で、順序が立ちて居り、よく勞力の分配が出来て閑を生ぜぬ様にし、餘計な骨折りや、下らぬ心配をせぬことにし、何時も面白く働くことが出来るやうに仕事の割振りが出来、分擔と協同とを遺憾なくするものである。

一、よく協同を利用する。(時勢に適應する)

或は農會或は、産業組合、或は農業倉庫、或は何れも組合と、よく協同して、個人で出来ぬことが出来る様にし、自分でやれぬことがやれる様にし、己一人の力で及ばぬことも出かす様にし、小き個人の力を合せて

偉大なる人格者の力とするに抜け目のないものである。

一、何事にも油断をせぬ。(細心である)

敵は遠きに在らず近きに在りの理を知りて、妻子にも油断せず、兄弟にも油断せず、臺所元には勿論、火の用心、鼠の末に至るまで氣をゆるさぬ心懸けがあり、一厘一毛の金の出入にも氣をつけ、一事一物の見聞にもほんやりせぬ用意があるものである。

一、常に公共に志ざす。(考が大きい)

利己の觀念の小慾なるを悟り、私慾を逞うすることの非道を知りて、衆と俱に喜び、多數と偕に樂むことの幸福を覺りて、國家、社會、町村隣人のために、金を出すことや、利を分つことや、力を副へることを敢てするものである。

一、報謝の念が深い。(報恩の辨へがある)
よく國の恩、君の恩、天地の恩、人の恩を辨へて、己が徳行を以て之に報いんことの心深く、従つて常に難有いといふ觀念があり、神佛にも感謝する行事をせぬでは氣がすまぬものである。

一、質實の風が抜けない。(驕らない)

よく農業の特徴を知り、農村生活の長所を辨へて居る結果、たとへ成功しても質素忠實の風貌が抜けないで、何處となく富貴も淫する能はず威武も屈すべからざる氣品が具はり、流行を逐はざるも、侮り難い品位があるものである。

吾輩は以上十事の項目を挙げたが、賢い農人は少くも之丈の資格が具はらねばならぬ様に思ふ。故に賢い農人の資格は、今日に於ては如上

十箇條を數へて然るべきであるとする。されば農人たる者は勿論、農人の指導に當るものは、よく自家に反省して其足らざる所を補ひ、其足らざるを足して以て、一日も早く賢い農人となり、同時に隣人も導き後輩をも誘うて、一人でもより多くの賢い農人を増すに盡力し、而して後れ勝ちなる我農界の覺醒をはかり、振はざる我農業の進歩を満たし、以て我國家の現に苦しみつゝある食料の充實を遺憾なくし、工業原料の豊富をはかり、國民生活の上に安んずる所あるを得たいものである。今や戦後經營の第一年に當り、賢い農人の活動を望むは、所謂旱天に雨を待つ以上の要求である。希くば同志の人、夫れ此に努むる所あれと云彌。

非常の心得

米價益々下落して農民泣き、景氣振はずして商工の民嘆息し、地震火災の厄に遇うて離散の慘狀を呈し、風水害の難に罹りて悲嘆し、愛兒の大病に驚き哀しみ、慈母の死別に痛恨の情に堪へやらず、盜難破産に遇うて周章し、戦争喧嘩の仲間入りを餘儀なくされて狼狽するの類、世に甚だ多し。夫れ平和は常の状態にて、相變はらずと云ふは常時の形容詞なり。一度平和を失し、物事の相變るは非常の場合なりとすれど、常時と非常時と交々往來するは、之れ浮世の習、娑婆の特徵にて、平穩無事が世の常態と觀するは、未だ悟らざるものといふべきなり。

今の世、人多く事繁くなり、非常と觀すべき場合愈多きを加ふるが如し。而も非常に臨みて泰然自若たる者の少きは、心得なき者の多きを證するにて、當人の不幸は勿論、國民としての大恥辱にはあらずや。故に

此處に非常の心得をものするは、徒事にあらざるを信するなり。

心得の數々

- 一、非常に處するの心得は、常時に於てなすべきなり。盜人を見て繩を縛ふは既に遅しと悟るべし。
- 一、常時は非常時の準備をなす時と觀すべし、その準備の確實なる者は遂に非常の悲惨を避け得べきなり。
- 一、非常に二種あるは豫め知らざるべからず、一は避け得べきものにして、他の一は避け得べからざるものなり。彼はアキラメのつかざるものにて、此はアキラメ得べきものなり。
- 一、人の定命にて死するは避け得べからざる事なり、故に芽出度往生すと云ふ、無理を敢てして危篤に陥り大騒ぎをなすが如きは、われ人共

に悲しめども、之は避け得べきものなり。
一、避け得べからざる非常事は、之あるを豫知して、時に臨みて狼狽せぬ覺悟をなすべく、避け得べき非常事は、之を豫防して避くべき用意をなすべきなり。

一、非常事を豫防せば、非常事も亦常事なり。平等に罹災しても、悲嘆の憂目は避け得べきなり。

一、非常事の豫防法は千種萬態なり、今其の例を上ぐれば、衛生を重んずるは罹病を豫防する法なり。勤儉を怠らざるは破産を豫防する法なり。經濟を正しうするは負債を豫防する法なり。慈善を行ふは寂寞を豫防する法なり。

公共に輸し公益に盡くすは孤立を豫防する法なり。
貯蓄をなすは窮乏を豫防する法なり。
酒色を慎むは早衰を豫防する法なり。
進歩に努力するは退歩を豫防する法なり。
信用を重んずるは不融通を豫防する法なり。
利他を主とするは不景氣を豫防する法なり。
改良を怠らざるは不作を豫防する法なり。
用心を固くするは盜難を豫防する法なり。
人道を踐み行くは危懼を豫防する法なり。
私慾を逞ふせぬは憎怨を豫防する法なり。
正善を行ふは憂勞を豫防する法なり。

最下を以て身を養ひ、最上を以て心を養ふは、艱難貧賤を豫防する法なり。

修學習業は迷惑を豫防する法なり。

信仰を貴ぶは不安不立を豫防する法なり。

慎獨を守るは罪惡を豫防する法なり。

持戒遵法は犯罪を豫防する法なり。

適度になすは疲勞を豫防する法なり。

精勤奉公を大事にするは非免を豫防する法なり。

研究窮理を怠らざるは排斥を豫防する法なり。

力を養ひ技を練るは生活難を豫防する法なり。

規律を重んずるは周章狼狽を豫防する法なり。

一、非常時に備ふる所あり、非常事に豫防する所あらば、非常も亦驚くに足らざるなり。

一、常時に慣れて非常時を察せず、常時に忤れて非常事に慮るなきは、非常を災厄と観ずるものなり。

一、豊年に處して凶年を忘れざる農民は饑饉を知らず、景氣を迎へて不景氣に備ふる商工の民は、遂に不景氣の嘆息をせぬものなり。

一、金まはりのよき時に金融の艱難なる時を察し、信用ある時に不信用の苦痛を偲ぶものは、遂に不自由を知らざるべし。

一、健康なる時に病苦を思ひやり、働き得る時に働けぬ身の悲しさを察し得るものは、常に幸福を享くべきなり。

一、奉職のもの常に非職免職の時を思ふて備ふるを得ば、見にくき様は

- せぬですむものなり。
- 一、得意の時失意の境遇を察し、名譽の時不名譽の場合を考へて油断せずば、悔恨なくして世に處せらるべきなり。
 - 一、毎日復習して怠らざるものは、試験に臨みて周章てぬものなり。
 - 一、毎月勘定を正しくするものは、盆暮の仕拂に狼狽せぬものなり。
 - 一、常に掃除を遺漏なくするものは、大掃除の觸れ出しに騒がぬものなり。
 - 一、常に火の用心を怠らざれば、失火の厄は避けらるなり。
 - 二、今の世の人、常に座右に
手帖、鉛筆或は万年筆、手拭、マッチ、財布(金錢)鼻紙を用意して居れば、いざと云ふ場合にも用は缺かぬものなり。

- 一、世の人常に
借金、奢侈、怠惰、虚言、不始末、まけぎらひ、に遠ざかりなば、非常の災厄を避け得べきなり。
- 十可銘
- 一、公事は重んずべく、私事は軽んずべし。
私利を營むも畢竟公益に貢献せんが爲めなるべし。立身出世も要は君國を幸せんが爲めなるべし。公私を混同し、又は其前後を過るが如きは士民の恥辱之れより大なるはなかるべし。
 - 一、形に伴ふ生命は短くて、事功に伴ふ生命は長いと悟るべし。
身體、財産、地位、權勢乃至名利に關して、己が希望を達し得て満足

する時もありと雖も、畢竟夢の如かるべし。國家の如き、民衆の如き、社會の如き、永久の生命を有するものに向つて事功を擧げなば、在世はたとひ短かしと雖も、未來永久に新なる不朽の生命を得べし。此生命こそ貴むべき生命にして、人の得べき生命と悟るべし。

一、常に己を恃むべし、己に在るものを頼むべし。

一時も己を離れぬものは己なり、行く所に従うて己を處理するものも己に存するものにあらずや。人を頼むものは愚なり、物を持むものは痴なり。夫れ己の主は心なれば、心の修養を怠るなく、己に存する一物は力なれば、力の修練に務めて息まざれば、天下に恐るゝ所なかるべし。

一、不義不正は仇敵、善事は味方と思ふべし。

不義は之を懼れ、不正は之を怖れて避くべし。己を墮さざれば止まぬものなり。善事は之を行ふ艱難なりと雖も、また面白からざる場合あるべきも、親しむべく愛すべし。己を助けて向上せしむるものは善行なり

一、事をなすにあたり、順境に立つよりも寧ろ逆境に處するを幸なりと観すべし

順境は花の如く、逆境は實の如し、人生の趣味、行事の妙味は彼にあらずして此に在り。故に有爲の者は進むで逆境に立つの概あるべく、逆境に臨むで泰然たるの勇あるべし。諺に「艱難汝を玉になす」と云うてあるに於てをや。

一、業に對しては、始に信を以てし、中には樂を以てし、終りには喜を以てすべし。

職業に對し、家業に對しては、當初之れ我分擔の業なりと信ずるか、

或はなされべき仕事なりと信じて、以て行ふべきなり。努めて倦まず、勤めて飽かざれば、遂に其業に興味を覚え、面白味を感じるに至るべし。之れ業の中途に達せし時なり。自強愈息まざれば、歡喜の心起り、感謝の念をなすに到るべし、之れ業に入心し、業に同化せし時なり。人は此域に達せざれば、事功を擧ぐるに能はざるべし。

一、毀譽褒貶は恐るべからず、眞に畏るべきは良心の制裁なりと知るべし。世間の毀譽は公平を缺くことあり、人のする褒貶も往々誤まることあり、故に修身の参考に供すべきも恐るゝに足らず。善惡邪正の行爲は、己が心鏡に尤も明瞭にうつる。故に良心の制裁は尤も正確にして、尤も峻厳を極めて許すことなし、之れ刑に死するもの勤くして自殺するもの多き所以ならずや。

一、廣く見、多く聞き、遠く慮るの工夫あるべし。

廣く見ざれば時勢に通ぜざる弊に陥り、多く聞かざれば輿論を知る能はざる過を招き、遠く慮らざれば目前の小事に囚はるゝ侮を受くるものなり。斯くの如きは有爲の者の正に恥づべき所、沈んや永久の生命を得んと欲する者に於てをや。

一、快感と満足とは、たゞ善事を行つて得らるべきものと観すべし。

金銀財寶を以てしては快感を得らるべきものにあらず。それ等を失ふの時かへつて忍ぶべからざる不快を招くことあるべし。名利榮達未だ以て満足を得る能はず、寧ろ煩悶を増すことあるべし。如何なる時に於ても善事を行へば快感の禁すべからざるものがあり、如何なる場合に於ても善事を行ひし時、言ふに言はれぬ、満足を感じるものなり。

一、私には足ることを知るべく、公には足らざるを知るべし。
知足安分は私事の心得なり、公事にかけては常に不足を知つての努力
分外の發展をなすべき工夫あるべきなり。然らざれば日進月歩の國運を
開くことも出来ず、日新日々に新の國勢を張ることも出来ざるに至るべし
前途の遼遠なるものに於て、特に此心得を痛切に感ずるなり。

了

大正八年十月一日
大正八年十月十七日

印刷

定價金三十錢

著者

山崎延吉

發行者

上野七郎

印刷者

渡邊市太郎

印刷所

中外印刷工業株式會社

不許複製

發行所

東京市麹町區
永田町一丁目

中央報德會

振替東京九七〇〇番

著 生 先 二 丑 口 井

<p>刊新最 時 代 と 報 德</p>	<p>版 再 處 報 德 世 修 養 新 話</p>	<p>再 訂 版 報 德 溯 源</p>
<p>價 送 九 料 十 六 錢</p>	<p>價 送 七 料 十 六 錢</p>	<p>價 送 一 圓 五 十 錢</p>
<p>本書は報徳教の眞髓、歴史、沿革は固より地方自治の要訣、農村の振興地方篤志家の活動せる面影に至るまで論述せり。されば報徳の教を現代に活用せる幾多の活模範は之を本書に就て學ぶ所あれ。</p>	<p>著者が學生の心血を凝して大成せる「報徳溯源」の概要を更に平易通俗に説述せるものなれば、何人も本書を讀めば、翁の教義の眞髓を體得し、處世修養上の好指針たるものあらん。</p>	<p>著者翁に萬事を放地して、日米今市の報徳圖書館に歸居し、翁の遺書一萬餘卷を破し、潛居の哲學の眞髓を究め、之を現代の科學に照し、哲學的に解説せるもの即ち本書にして、本邦唯一の報徳哲學と稱すべき不朽の名著也。</p>
<p>發 兌 東 京 市 田 永 一 町 一 丁目 中 央 報 德 會 振 替 九 七 〇 〇 東 京</p>		

著 生 先 吉 延 崎 山

<p>版 九 農 村 小 話</p>	<p>版 五 婦 人 の 覺 醒 附 女 房 の 善 惡 競 (圖 表)</p>	<p>版 三 食 料 の 獨 立 附 農 村 振 興 策</p>
<p>價 送 二 料 十 二 錢</p>	<p>價 送 二 料 五 十 錢</p>	<p>價 送 二 料 十 二 錢</p>
<p>題して農村小話といふも、實は萬人の訓戒たるべき逸話、座右の銘等を書きつけたるもの也。(萬朝報評)</p>	<p>本書は婦人の天職を明かにし、其の自覺に資し、其の向上に後援せんが爲め、著者が滿腔の同情を以て著ばされたるものなり。</p>	<p>食料獨立の必要なることは今回の大戦に依りて最も適切に證明せられたる所也。山崎先生愛國の至情迸りて成れる者即ち本書也。</p>
<p>發 兌 東 京 市 田 永 一 町 一 丁目 中 央 報 德 會 振 替 九 七 〇 〇 東 京</p>		

自 治 研 究 者 の 實 典

内務省地方局編
増補
地方改良要項
廿版

價送
三料
十四錢

本書は地方改良の要項を簡單明確に知悉せしめんが爲め地方局に於て編纂せるもの、地方改良の何たるを知らんとする人は、是非一讀せざるべからざる名著也。

愛知縣立
農林學校長
山崎延吉先生著
三
自治と民育

價送
一料
八錢

地方の改良開發を圖り、自治の振興を期せんには先づ國民の自治思想を開發して其自覺に俟たざるべからず、本書は此要求を満たさんが爲めに通俗平明に自治の要諦を詳述せる者。

山崎延吉先生著
四
優良町村の建設

價送
二料
五十二錢

如何にして優良町村を建設すべきか、之に與る町村自治當局者、町村會議員及町村民の責務と心得とを簡明適切に説ける者也。

内務監察官 守屋榮夫先生著
再
地方自治の精神

價送
一料
廿八錢

本書の特色は單に地方公共團體の形式的方面を解説するに止まらず更に進んで其の實質を解剖し神聖雄大なる使命を説示せる點に在り即ち地方人民の理智的開發以外に情操的涵養を主眼とせる所に在り。

中央報徳會編
三
自治の新思潮

價送
一料
十五錢

一木、水野、井上諸博士を始め小橋次官、塚本清治、渡邊勝三郎、中川望、潮惠之輔、田子一民等内務當局者并に田中義一、澤柳博士、道家、岡本兩局長其他自治に關する當代の權威者の講演を編輯せるもの也。

井口丑二先生著
四
地方改良の方法

價送
五料
十六錢

著者洽く各地の模範町村を視察し得たる經驗と材料とを骨子とし如何にせば優良町村たり得べきかを内外の實例に就き詳述せる者也。

發 兌 東 京 市 麹 町 一 丁 中 央 報 徳 會 振 替 東 京 〇 〇 七 九

發 兌 東 京 市 麹 町 一 丁 中 央 報 徳 會 振 替 東 京 〇 〇 七 九

神奈川縣通 俗教育主事 佐々井信太郎先生撰
再版 新報 德記
 (一名二宮先生傳)

價一圓一錢 送料二十錢
 青年立志の好模範たる二宮尊徳翁の傳記並に其の教義を詳説したる者一讀眞に懦夫をして起たしむるものあり。

井口丑二先生著
最新刊 報 德 清 談

價五錢 送料四錢
 著者の別著「時代と報徳」の姉妹篇にして報徳の原理原則より、衣食住問題、禁酒問題各種の健康法等に至るまで細大論述せる者、趣味と教訓とを併せ得べし。

井口丑二先生撰
六版 二宮翁金言集

價二錢 送料四錢
 二宮翁大教訓の精髓は收めて此の書中に在り。以て修養の指針となすべく座右の銘となすべきものあらん。

内務省囑託 中央報徳會講師 村田宇一郎先生著
最新刊 民 育 雜 話

價三錢 送料二錢
 著者最近一年餘、全国各地を遊歴し、親しく實地を視察して、感歎の餘りに筆を執りて紹介せる各地に於ける篤志事業の要綱なり。補習教育、青年團、納税獎勵法を始め、地方の自治民育事業の精彩を幅めたるものなり。

内務書記官 田澤義鋪先生著
最新刊 實業補習學校と公民教育

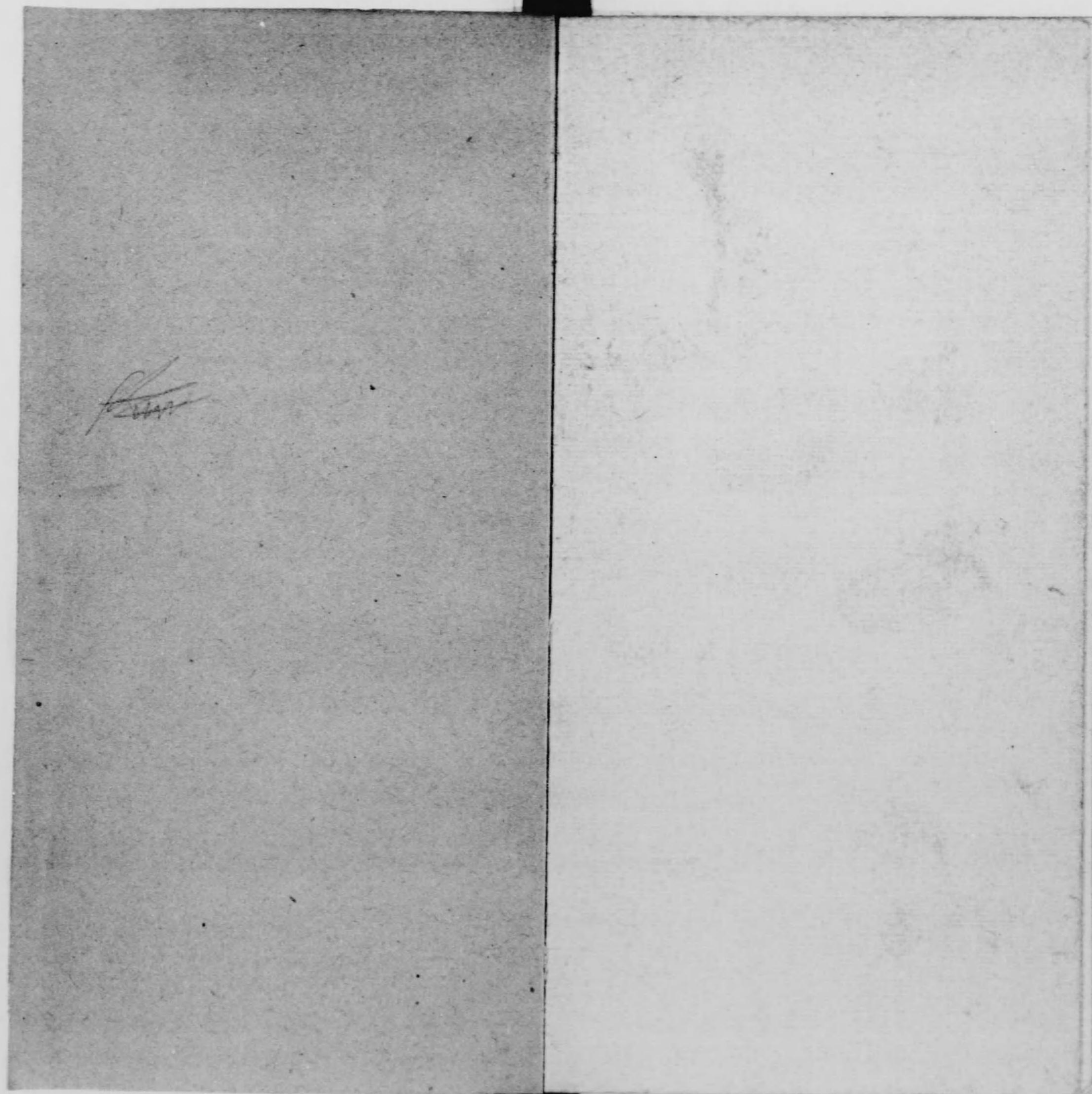
價三錢 送料二錢
 本書は著者が曩に天下に公にして絶大の好評を博せる「農村補習教育の研究」を絶版に附し、更に最新の研究に基きて新に稿を起せるものにして著者が多年熱心主張せる所を公表せるものなり。

山崎延吉先生述
最新刊 田 舍 草 紙

價三錢 送料二錢
 農村の振興、農事の改良に當る人々の精神的向上を奨め、且つ其の模範たるべき篤志家の事例を擧示せるものなり。

發兌 東京市麹町區 中央報徳會 振替 〇〇七九

發兌 東京市麹町區 中央報徳會 振替 〇〇七九



373
377

終